

619

619-73



1200501537164

73

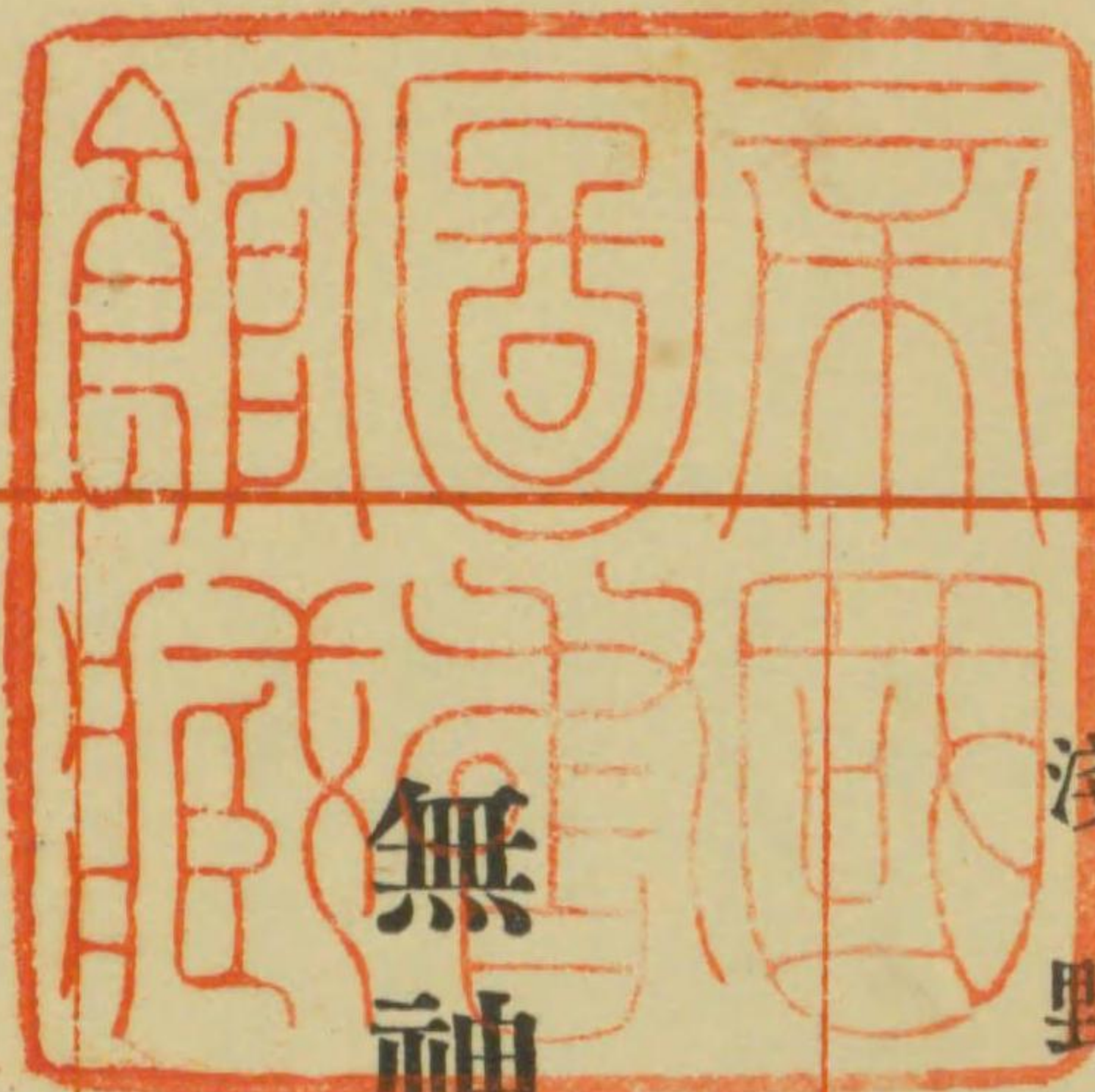
浅野研真著

無神論と反宗教運動

|| 其の史的展望 ||

大雄閣

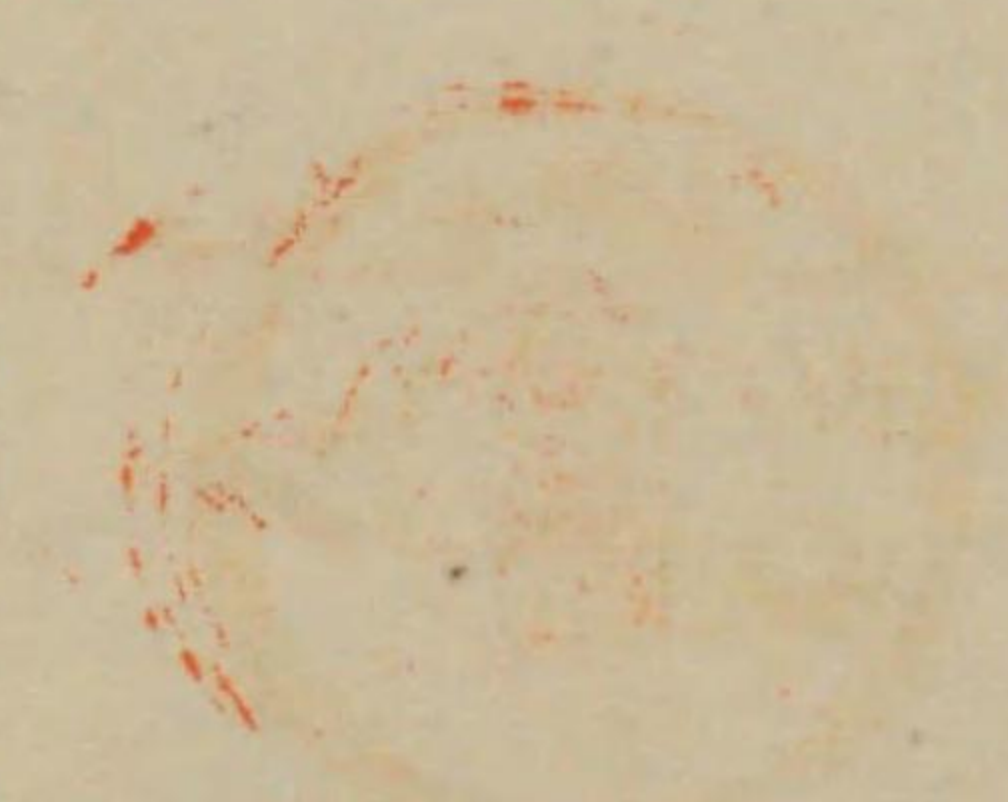
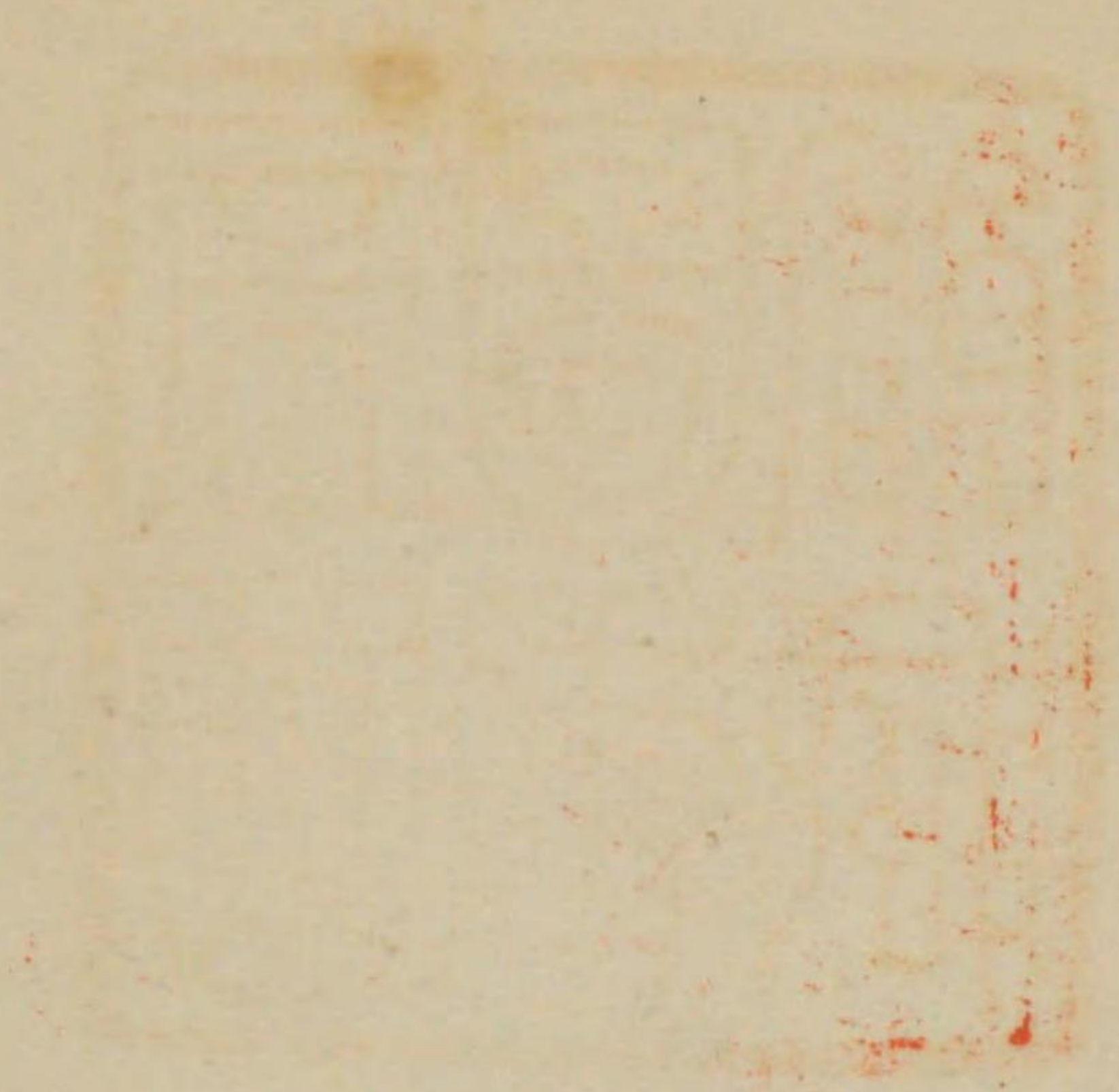
440



浅野研真著

無神論と反宗教運動

大雄閣



619-73

序 文

今日、世界の思想界に現れてゐる階級的困亂は、特に無神論の其れに於て、その頂點を見出すであらう。無神論こそは、特に、かのヨーロッパ文化の根基をなすキリスト教神學の全部的否定なのである。而して、かかる無神論より發現する反宗教運動は、常に早く、フランス革命時代から、既成教團、教會宗教に對して、清算運動を企圖し規定し來つてゐる。このことは、現に、ソヴェート同盟に於て最も廣汎に組織立てられてゐて、その國際的影響は實に甚大なるものがある。

此の影響は、特に日本に於ても、敏感に感ぜられてゐる。そして、そこに組織化された反宗教運動の存することは、世人の良く知るところであらう。

此の小冊子に於ては、著者は、さうした無神論と反宗教運動の歴史的發展を世

界史的視野に於て跡づけ、理論と實踐の兩面にわたつて、簡單なれど充分に、その全面的な叙述を試みた心算である。叙述の様式は、初め講座式に執筆したものであり、且つ力めて客觀的(?)描寫がなされた。従つて、廣汎な一般讀者層を対象とする一個の啓蒙書たり得るものであらうと思惟する。

本書は直接には吉村貫練氏の鞭撻を契機として纏められたものである。また本書が一小冊子として刊行さるるに至つたに就ては、偏へに高楠正男氏の慫慂によるものである。著者は茲に兩氏に對して、心からなる謝意を表するものである。

一九三二年七月一日

東京青山アパートの一

淺野研眞

目次

序文	一
序説 資本主義の行詰りと反宗教運動	一
一、反宗教運動の現れ	一
二、未曾有の經濟恐慌	四
三、反宗教運動の必然性	七
前篇 無神論(反宗教思想)の史的發展	九
第一章 十八世紀フランス唯物論に於ける無神論	一一
第二章 空想的社會主義者の反宗教思想	一五
一、サン・シモンの宗教に對する態度	一六

- 二、フーリエの宗教思想 一八
- 三、博愛主義者オーエンの宗教観 二〇
- 第三章 ヘーゲル左黨の無神論 二三
 - 一、ヘーゲル及びヘーゲル左黨 二三
 - 〇二、フオイエルバツハの無神論 二六
- 第四章 マルクス及びエンゲルスの無神論 三二
 - 一、唯物史觀の基礎觀念 三二
 - 〇二、宗教とは何か? 三三
 - 〇三、將來社會に於ける宗教の消滅 三六
- 第五章、レーニンに於ける實踐的無神論 三九
 - 一、マルクス主義の發展としてのレーニン主義 三九
 - 二、宗教及び神の概念 四〇
 - 三、宗教の社會的起源 四三

- 四、プロレタリア宗教政策 四六
 - a、宗教は私事か? 四六
 - b、反宗教運動の眞意義 四七
 - c、宗教家に對する對策 五一
- 第六章 アナーキストの反宗教思想 五四
 - 一、序 説 五四
 - 二、プルドン 五五
 - 三、バクレーニン 五六
 - 四、クロボトキン 五九
 - 五、結 言 六〇
- 第七章 日本に於ける無神論 六二
 - 一、序 説 六二
 - 二、加藤 弘之 六二

三、中江兆民	六二
四、幸徳秋水	六五
五、佐野學	六七

後篇 反宗教運動の史的發展

第一章 フランス大革命と反宗教運動	七一
一、序	七一
二、教會財産の收用	七三
三、宗教團體法	七四
第二章 十九世紀に於ける西歐の反宗教思想——巴里コンミュンと反宗教運動	七六
一、序	七八
二、國家と教會の分離	七九
三、反宗教々育	八二

四、農民と宗教	八四
五、僧侶の人質	八六
第三章 ソヴェート同盟に於ける反宗教運動	八八
一、序	八八
二、ソヴェート革命と宗教——宗教に関する諸規定	八九
三、戰鬪的無神論者同盟	九四
四、コルホーズ(共同農場)と反宗教運動	九七
五、ピオニール(無産少年團)と反宗教運動	九九
六、ソヴェート映畫と反宗教運動	一〇一
第四章 反宗教運動の國際化——プロレタリア自由思想家インタナショナル	一二一
一、その起原	一二一
二、その進展	一二三
三、その現勢と各國支部	一二六

第五章 日本に於ける反宗教運動……………二一八

一、序……………二一八

二、反宗教闘争同盟準備會……………二二〇

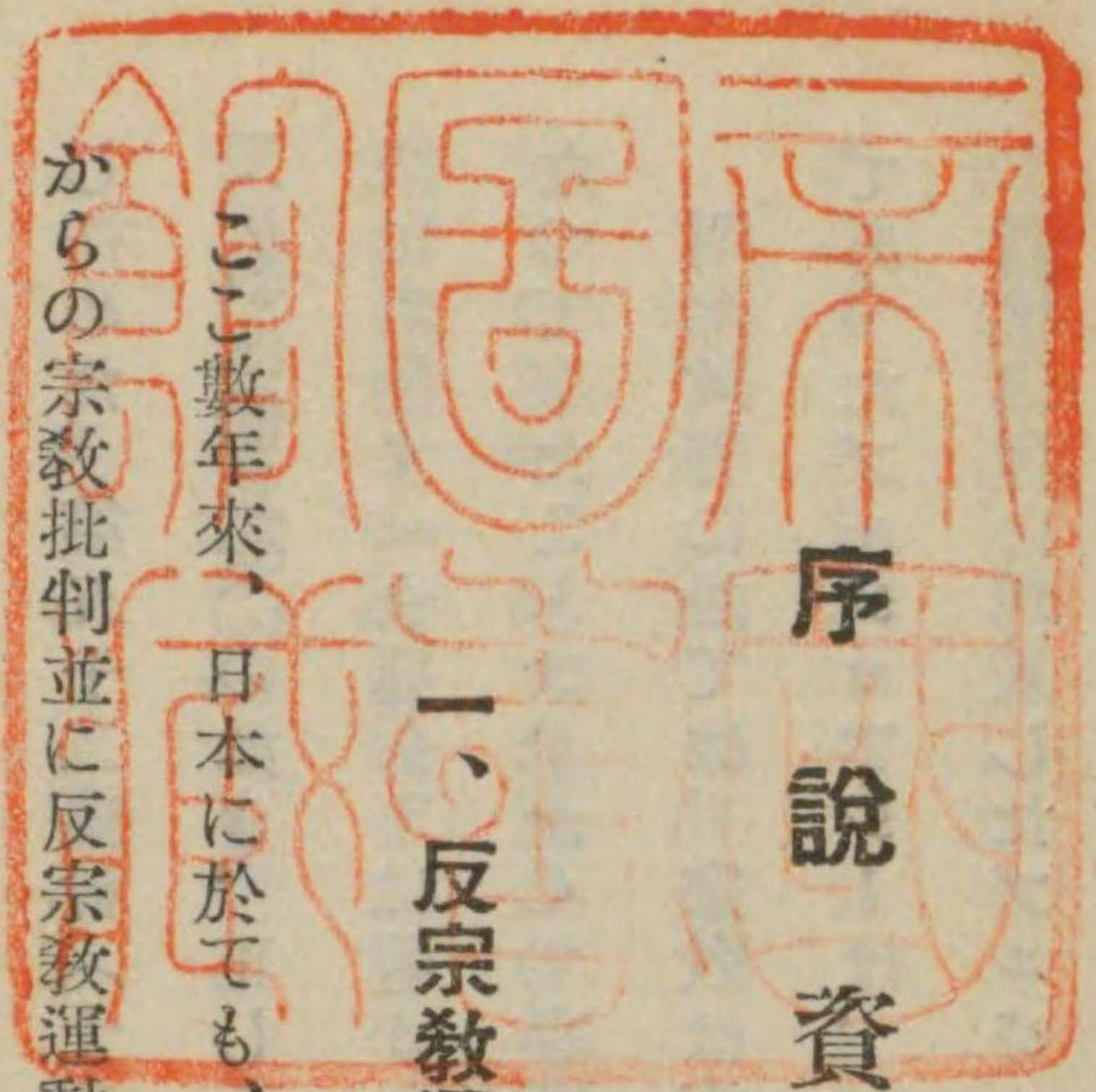
三、日本反宗教同盟……………二二五

四、結言——今後の展望……………二二六

附録 プロレタリア自由思想家インタナショナルの状勢(アルナチャルスキー)……………二二九

序 説 資本主義の行詰りと反宗教運動

一、反宗教運動の現れ



ここ數年來、日本に於ても、プロレタリア運動の進展に伴つて、プロレタリアートの側からの宗教批判並に反宗教運動が、なされ來つて居た。

然し、この反宗教運動の潮流は、昨年(一九三一年)に至り、特にその本道に入り初めた。そして歴史上、未だ嘗つて見ざる大きな問題となつて、現に今日の議事日程に登つてゐるのである。かくして從來、一部の人々によつてのみ行はれてゐた宗教批判は、今や全プロレタリアートの關心的的となり、進んでその實踐的清算へと發展しつつあるかの如くである。

吾々は、今日まで、水平社運動や、農民組合運動に於て、本願寺に對する募財拒絶の運動の如きが、多かれ少かれ行はれて來てゐることを知つてゐる。しかし嘗つての、さうした運動は、未だ全プロレタリアートの全般的な闘争のプログラムには組み入れられてゐなかつたやうである。

然るに没落過程にある日本ブルジョアジーは、次第に意識的に、露骨な宗教利用を企圖し初めた。第五十二議會（大正十五年）の『宗教法案』や、第五十六議會（昭和四年）の『宗教團體法案』の如き、正しくその一つの現れであつた。宗教は今や全體として、支配階級に奉仕すべき運命下に置かれんとしてゐる。そのための法制さへが、不可避的に必要となつて來たことは、かくて事實が最も雄辯に物語つてゐるのである。

明治教育に於ては、宗教は完全に學校から排除された。即ち嘗つては極めて『革命的』であつたブルジョアジーは、一度は宗教を驅逐したのであつた。然るに今日はどうか？

崩壊過程に轉入したブルジョアジーは、今や凡ゆるものを利用し初めたのである。そして自己階級の永續化（生き延び）に狂奔し初めたのである。

マルクスも指摘したやうに、宗教こそは、何にも増して、最も勝れた『心的壓迫』の機關なのである。當に溺れんとするブルジョアジーが、今や賢明にも目を著けたのは、正に此の宗教に於てであつた。

宗教團體に對する法律上の諸權利の確認、教化團體の助長、宗教社會事業の助成、宗教教育の提唱、教化總動員の組織——これ等すべては、今や積極的な宗教利用として、ブルジョアジーの最も力を入れてゐるところのものである。その他、個々の資本家や工場主などが、意識的に宗教を利用して、従業員の心的壓迫を強化しつつあることは一般周知のことだ。工場布教、軍隊布教、鐵道布教、學校布教などは、皆、さうしたブルジョアジーによる宗教利用の一連の現れなのである。

かうした狀勢の下に於て、今や強烈な反宗教運動が、プロレタリアートの側から擡頭し初めたのである。そしてその潮流は、今や全般的なものとして、あらゆる社會層の隅々まで喰ひ込んで行くであらう。それは寧ろ餘りにも當然な且つ必然的な現れであらう。

二、未曾有の經濟恐慌

今日の不景氣、文字通りに殺人的な不景氣は、また反宗教運動にとつて、一つの大きな決定的契機を供給してゐる。

一九二九年十月、ニューヨークの株式取引所の崩壊にその端を發した今次の世界經濟恐慌は、その後既に三ヶ年を経過せんとするのに、未だ何等、好轉の徴候さへ見えない。此の經濟恐慌こそは、いはゆる資本主義第三期の根本的形相であつて、この恐慌は、從來の周期的恐慌とは根本的に異なり、多かれ少かれ最後の恐慌として現れてゐる。

ブルジョア經濟學者と雖も、最早此の恐慌を樂觀視得ざるに至つてゐる。あらゆる中間階級層は没落し、次等にプロレタリア化しつつある。今や中農・小農・自作農は、次第にその僅かばかりの土地をさへ手ばなすべく餘儀なくされ、次第に貧農群へと追ひ込まれつつある。それにも拘らず、極少數者の大地主は、獨占的に土地を兼併しつつある。都市に於ても同様に、中小商工業者の没落は、大商工業者の市場獨占と平行しつつある。

失業者は非常な數字を以て増加しつつある。今年に入つて、完全失業者の數は、全世界で約三千五百萬人に達してゐる。日本だけに就いて云つても、既に百五十萬を突破してゐるのである。吾々は、この巨大な失業者群に就ては、尙ほ彼等の背後にある頼りなき巨大な家族群を忘れてはならない。いたいけない缺食兒童の悲慘なる状態を見よ！ 來るべき次の世代は、既に若葉の中から、心身ともに蝕ばまれて行くではないか？ それから、かの家族中心を見よ！ 全人口の九十パーセント以上を占むるプロレタリアート、勞働者貧農を養ひ得ないブルジョア社會そのものは、それ自體、既に大きな根本的矛盾を孕んでゐるものである。ブルジョア經濟組織の内的矛盾は、かくして今や極めてハッキリと、明るみへと出されたのである。會ての經濟恐慌は、周期的に、一定の期間を経て、やがて輝き好景氣をもたらすものであつた。今次の恐慌に對しても、ブルジョア經濟學者や、ブルジョア・ジャーナリスト達は、幾度か景氣恢復の近きを説教し、豫言して來た。而して今度の世界經濟恐慌が、在來の經濟恐慌と本質的に異なること、並に第二次世界戦争の危機の到來、及び全世界的プロレタリア××の切迫、と云ふ重大なる事實には、全然觸れないの

みならず、觸れ得てゐないのである。

ドイツの戦争賠償金に對するアメリカ大統領フーヴァの聲明した支拂猶豫の國際的モラトリウムは、しびれを切らしてゐたブルジョア經濟學者や、ジャーナリストをして、時こそ來れとばかりに、大聲に『フーヴァ景氣』なるお題目を叫び上げさせた。だのに、それは全く數日間の、文字通りの新聞景氣でしかなかつた。餓死線上にある民衆にとつては、それは何んの足しにもならなかつた。没落に頻しつある中小商工業者、中小農にとつては、フーヴァ景氣もくそもあつたものでない。

かくして景氣好轉への望みは、社會意識のおくれた階級層に對しても、最早や、あてなきものとなつてしまつたのである。況んや巨大な失業群に於ておやである。(最近、實施されかけた救護法の如きものは、全く燒石に水にも及ばないものである)。

そこで、かうした社會状態は、然らば如何なる歸結を引き出すであらうか？

絶望的な此の恐慌、餓死線上の民衆の生活は、今や自然發生的に、全プロレタリアートとその諸同盟軍(貧農、中間層など)の階級的自覺をハッキリさせ、かくして過去の凡ゆ

るヴェールを引き剥ぎ、今や正に、決死的な攻勢へと組織されんとし、また組織されつつある。

かくして歴史的必然としての世界的プロレタリア××への道が準備されつつある。

三、反宗教運動の必然性

既に前述したやうに、ブルジョアジーの宗教利用は、今や益々露骨に、且つ組織的になされ初めてゐる。そして此のことは、現下の客觀狀勢下に於て、即ち資本主義第三期に於て、特に、露骨に現れつつある。

ブルジョアジーが意識的に宗教を利用すればするほど、プロレタリアートの反宗教闘争運動は、次第に尖鋭化すべき必然性を持つものである。

況んや宗教は、既に其れ自體として、反プロレタリア的存在である。宗教は民衆にとつて阿片である(マルクス)。然るに今や、之が意識的に、ブルジョアジーによつて利用されて、一種の強力なる『心的壓迫』の道具として、プロレタリア大衆の頭上にふりかかつて

來る時、そこに組織的な反宗教闘争の運動が激化して來ることは、極めて必然的な現象でなければならぬ。現下に於ける反宗教闘争の必然性は、正に茲にこそ存するのである。

嘗つての自然發生的な募財拒絶運動は、従つて今や、より廣汎な、組織的な、且つ全面的な反宗教闘争の運動にまで開展し來つたのである。今日の反宗教運動は、最早や單なる募財拒絶の運動ではなく、より全面的な運動となつてゐる。即ち宗教を、他の社會機構から切り離して排撃するものではない。それはブルジョア階級の階級支配の一要具としての宗教をこそ、徹底的に排撃せんとするものなのである。

かくして、眞に階級的、プロレタリア的立場に立つ反宗教闘争運動は、その必然性に於て、プロレタリア解放運動の全分野に於ける文化闘争の一翼として、徹底的に闘はるべきものとされてゐる。

即ち反宗教運動は、現下のプロレタリア運動の一般的狀勢に應じて、階級闘争の一翼として、執拗に、果敢に、且つ組織的に闘はれてゐるのである。

前篇 無神論(反宗教思想)の史的發展

近世に於けるプロレタリア運動のイデオロギーの分野に於ける闘争は、先づ無神論の形態に於て現れたのであつた。

マルクスはその『ヘーゲル法律哲學批判』の冒頭に於て『宗教の批判こそ、一切の批判の前提をなすものである』と云つてゐる。

即ち中世紀的な宗教萬能・教會專横の殘存物を克服するためには、何よりも先づ、宗教批判が必要缺くべからざるものであつた。而して其れが聽て社會批判・政治批判の基礎となつたのである。

かうした前提としての宗教批判は、無神論の形態に於て、體系化されて行つたのである。けだし、ヨーロッパ先進國、即ちキリスト教國に於ては、かの無神論こそは、宗教批判の最も深刻なる急所であり、神の存在の否定は、直ちに宗教の全體的否定を意味したのであ

る。即ち三位一體の體系を基礎とするキリスト教神學は、無神論そのものによつて、完全にその根基を失はしめられるのである。

吾々は今、さうした無神論の史的發達を、近世プロレタリアートの解放運動の線に沿うて、跡づけて見たいと思ふ。

(註) 今日、ソヴェート・ロシアに於ては、反宗教運動の基本的團體は、いはゆる「戰鬪的無神論者同盟」(エス語名—Unio de Militantaj Ateistoj)である。これは直接的には、ツァール時代に傍若無人的な存在をなしてゐたギリシヤ正教(キリスト教)に對する反宗教運動として組織されてゐるものである。詳細は後篇の運動篇に於て研究したいと思ふが、かく無神論は直ちに反宗教思想の大宗をなすものである。否な、無神論こそ、反宗教思想の核心である。

尙ほ此際、注意すべきことは、所謂「神なき」宗教の存在である。歐米の宗教學者は、多く例へば佛敎を以つて、簡單に其の實例として擧げてゐる。(Durkheim, *Les formes élémentaires de la vie religieuse*, p. 41.) 然し、かうした立論は、幾分、禪なんかに對しては肯定されるものであらうが、特に他力敎なんかに於ては、何のたしにもならないのである。このことは、別の機會に、より詳細なる論議を展開したいと考へてゐるが、今は一つのテーマを提起するに止めに置かう。

第一章 十八世紀フランス唯物論に於ける無神論

— エルヴェシウス、ドルバツク、等々 —

近世に於けるプロレタリア解放運動の線に沿うた反宗教思想としての無神論は、十八世紀フランス唯物論に於て、特に著名なものがある。勿論、それ以前に於て、さうした思想學説がなかつたと云ふのでは決してない。然し乍ら、それがプロレタリアートの解放運動の先驅たりし點に於て、十八世紀フランス唯物論こそは、現代の反宗教運動に對して、その多くの素朴性にも拘らず、非常に重要なものであるのだ。特に其れに就て、何等ままとまつた紹介も研究も試みられてゐない現代日本にとつては、十八世紀唯物論の再吟味こそは、絶対に必要なものの一つである。

『吾々は今や、エンゲルスが嘗つてドイツの社會主義者に與へた所の、十八世紀のフランスの無神論及び啓蒙主義の文献を翻譯して大衆の間に流布すべきだ、と云ふ忠告を、實現

せねばならぬと考へる。』

これは一九〇五年にレーニンが書いたところのものである（拙編「マルクス主義の宗教批判」一一二頁参照）。所で、此の言葉こそ、正に我が日本の今日に適切なものではあるまいか？
それ故に、吾々は先づ、十八世紀フランス唯物論の無神論の研究から始めやう。（註）

（註）十八世紀フランス唯物論の研究のための邦語参考書としては、次の如きものがある。プレハノフ「近代唯物論史」（同人社）、プレハノフ「史的一元論」（鐵塔書院）、テポリー「フランス唯物論史」（南宋書院）、フインゲルト、シルヴィント共著「史的唯物論教程」（共生閣）、「フランス唯物論哲學」（中央公論社）。

さて、十八世紀フランス唯物論者としては、ラメトリー、ドルバツク、エルヴェシウス、デイドロー、等々が、その主要な代表者として挙げられやう。

彼等は、デカルト、スピノーザ、ロツクなどの影響の下に、その學説を發展させた。従つて彼等の世界觀の中には、經驗論と合理論とが結合されてゐた。即ちフランス唯物論には、デカルトの合理論的物理学、スピノーザの形而上學、並にロツクの認識論などが、そ

の影響を與へてゐるのである。

此の十八世紀フランス唯物論は、一言にして云へば、急進ブルジョアジのイデオロギイであつた。その理想とする所は、社會の發展を妨害する凡ゆる封建的束縛からの解放であつた。

即ちフランス唯物論者たちは、急進ブルジョアジのイデオログとして、貴族及び僧侶の公認のイデオロギイたる宗教に對して、激烈なる鬭争をなした。即ち彼等は、宗教的迷信及び儀式を痛烈に批判し、それと同時に僧侶の頑迷と虚飾を暴露した。

さうした僧侶たちの亂行は、フランス革命の前夜に於ては、その極點に達してゐた。従つて當時の宗教と僧侶は、充分その批判を受くべきものであつた。

當時に於けるフランス唯物論者の宗教論は、大きな「煽動的意義」を持つてゐた。然し理論としては、甚だしく深みが足りないものであつた。即ちドルバツクも、エルヴェシウスも、宗教を以て單なる人間の迷妄と見なし、僧侶の意識的偽瞞の結果と見なしたのである。

ドルバンク (d' Holbach, 1723—1789) の主要著書は、『自然體系論』(Système de la nature, Londres, 1770) 及び『社會體系論』(Système social, Londres, 1773) である。彼は、そこで、何人よりも頑強に、確信を以つて、絶えず宗教と戦つたのである。そして彼は、かうした勝れた鬭争的な無神論文献を作り上げたのである。それは今日でも尙ほ、無比の傑作として残つてゐる。(デボーリン、前掲書、一二六頁)

エルヴェシウス (Helvétius, 1715—1771) は『精神論』(De l'esprit, Paris, 1758) 及び『人間論』(De l'homme, Paris, 1772) などを書いた。そして宗教批判を試み、無神論を主張してゐる。

所で、フランス唯物論者の弱點は、彼等がその唯物論的見地を徹底させ得なかつた點にある。フランス唯物論者は、彼等の反對論者たる觀念論者と同様に、形而上學者であつた。而して彼等の唯物論は、いはゆる機械的唯物論に墮してしまつたのである。

だが、要するに反宗教運動の關する限り、十八世紀フランス唯物論者たちの業績は、今日尙ほ極めて大きい重要性を持つものであることを忘れてはならない。

第二章 空想的社會主義者の反宗教思想

—サン・シモン、フーリエ、オーエン—

フランス大革命を境界線として、近世社會思想は、より明白にプロレタリアートの大衆的背景を持つことになつた。

十八世紀(後半)の唯物論は、前述の如く、急進ブルジョアジイのイデオロギーであつて、フランス大革命の前夜のものである。従つて其れは未だ純然たるプロレタリアートのイデオロギーではなかつた。

然るに十九世紀に入ると、プロレタリアート自身による階級的解放運動が始まるのである。而して其の先驅者として、吾々は普通、いはゆる「三大ユトピアン」、即ちサン・シモン、フーリエ、及びオーエンの三人を擧げるのである。この稱呼は、元來、エンゲルスの初めて用ひたものであつて、彼等は一擧にして、全人類を救はんとしたものであつた。即

ち、そこにこそ、所謂ユトピアンたるの面目躍如たるものがある。事實は、被壓迫階級としてのプロレタリアートの解放が遂行されねばならないのであつて、抽象的な『全人類』が問題とさるべきものではない。

然し、さうした空想的な、素朴的な思想體系を脱し得てはるなかつたが、この思想體系こそは、マルクス主義の源泉の一つとして、特記さるべき重要性に富むものである。然らば、此のユトピアンたちに於ては、その宗教思想は、如何に現れてゐるか？

これは甚だ興味のある問題であるが、吾々は此處で其れを詳細に述べる餘裕を持たないことを遺憾とするものである。即ち茲では只簡単に、その概要のみを述べるに止めざるを得ないのである。

一、サン・シモンの宗教に對する態度

第一に、サン・シモン (St. Simon, 1760—1825) は、宗教を如何に批判し、宗教に對して如何なる態度を持したであらうか？

サン・シモンは、多くの著作を残してゐるが、その晩年の最後の著作こそは、即ち『新キリスト教』なのである。サン・シモンは本書に於て、徹底的に既成宗教の腐敗墮落を暴露し告發してゐる。

然し、サン・シモンの究極目的は、宗教批判から宗教否定に轉じたのではなくして、結局、要するに一個の新宗教改革の運動になつてしまつたのである。否な、初めから、宗教改革が目指されてゐたのである。即ち、云ふところの『新キリスト教』の樹立の運動に努力したのであつた。

キリスト教の産業的・社會的な再改造、即ちキリスト教のプロレタリア化こそが、サン・シモンの結論だつたのである。

かの近世社會學の父と稱せられてゐるコント (Auguste Comte, 1798—1857) は、その青年時代、サン・シモンの一門下生であつたのであるが、此のコントは、その青年期に於て、完全に「神を認めざることを告白し、カトリック教に對して根本的に反抗したものであつた。然るに此のコントも、その青年時代の師サン・シモンと同様に、その晩年に於

ては、一つの新宗教たる『人類教』(Religion de l'Humanité)なるものに隠れてしまった。かうした所にも、空想的社會主義者の特質があるのであらう。

二、フーリエの宗教思想

次にフーリエ (Charles Fourier, 1772—1837) を見やう。フーリエは、サン・シモンほどに熱情家ではなかつた。むしろ冷靜な氣質の人であつたやうだ。彼の宗教思想としては、小さいが纏つたものとして小冊子『近代人の無宗教的精神』(L'Esprit irréligieux des modernes) がある。尙ほ其他の諸著作中にも、隨所に宗教に觸れた部分があるが、要するにフーリエは、サン・シモンよりも、ずっと宗教に對して冷淡であつた。

フーリエは宗教上の教義に支配されてゐなかつた。さうしたものは、彼にとつて、何の原動力にもならなかつた。彼は、宗教的啓示の教義によつて、科學を基礎とする、引力の學說を紛糾させることを避けやうと欲したのである。宗教的啓示を荷なはされたのは、イエスなのである。何故なら、イエスはハツキリと『シーザーのものはシーザーに返せ、神の

ものは神に返せ』と云つたからである。

フーリエによれば、文明人即ち近代人は、宗教的精神を持つてゐないのであり、神を信じてはゐないのである。而して諸宗教は、政治と同様に、農民や、民衆の精神の教養を行はないために一致協力してゐる、とさへ批判してゐる。そして宗教は、貧乏をば永久的幸福の道であるかの如くに賞めそやすものである、と批評してゐる。また宗教は、神の名に於て、ありとあらゆる暴虐を行ひ、ありとあらゆる罪惡を犯してゐるものであると、非難してゐる。

然し結局、フーリエも亦、その克明なる宗教批判にも拘らず、新宗教の存立を可能ならしめてゐる。即ち彼に於ては、『新宗教は、艱難を有難がる所のカトリック教とは反對に、快樂を有難がるものでなければならぬ』のである。而して彼の設計した理想社會に於ては、即ち共同社會に於ては、『宗教精神は産業に結び付けられてゐて、最も賞讃すべき機能である』とされてゐる。茲に於て最早、フーリエに於ける宗教批判が、如何なる航路を辿つたかは、餘りにも明白である。要するにフーリエも亦、サン・シモンと同じ轍を踏んだ

ものと云はねばならない。

(註) フーリエの宗教思想に就ては、E. Silberling, Dictionnaire de sociologie philosophique, Paris, 1911, P. 372-374. を参照した。フーリエの宗教思想に就ては、今日まで日本に於ては、恐らく殆んど何人も觸れなかつたやうに思ふ。然し私は之を相當重視すべき必要があると思つてゐる。

三、博愛主義者オーエンの宗教観

第三に、オーエン (Robert Owen, 1771—1853) を見やう。オーエンは前二者のフランス人なるに反して、イギリス人なのであつた。彼は極めて低い身分から身を起して、一時は英國切つての大實業家になつた。然しオーエンは、自分の工場で労働者を搾取するに忍びなかつた。かくして「博愛主義者」オーエンは、色々な福利事業をやるのである。そして最後は、素寒貧になつて、尾羽打ち枯らして死んで行くのであつた。

此のオーエンに於ても、宗教に對する批判は、屢々なされてゐる。特にその晩年に於ては、猛烈な教會攻撃をやらかして、甚だしく其の不興を買つてゐる。

全くオーエンは、『世界の全宗教を否定し、排斥しやうと決意した』(自叙傳、邦譯、二六〇頁)とさへ述べてゐる。

またオーエンは云つてゐる——『私は人間のうちのあらゆる本質的・永續的の進歩改良に對する大障害は、地上諸國民の宗教だ、この困難が克服され得ねば、人類はひどい小兒じみた無智——人間のあらゆる合理的性能を破壊し去る一つの無智——に永久に束縛されたままで居らねばならぬと私は發見してゐたのだ』(同書、二五八頁)。

『世界の諸宗教は、あらゆる虚偽・不統一・罪惡の、また人類のあらゆる不幸の眞因であり、常に然りしものである』(同三三一頁)。

然し、さうした果敢なる宗教批判にも拘らず、最後にオーエンは云ふ——『私は諸君から宗教を奪ひ取らうとしてゐるのではない、唯その誤謬をだ。眞の宗教のみこそ、善・叡智(知識も、人事一切へのその正しき適用をも含めて)及びその一切の變化を通じて悉く永遠なる人間の無窮の幸福を創造し、不斷に確保し得るのだ』(同三三七頁)。

かくしてオーエンも亦、その所謂「眞の宗教」の提唱へと墮して了つたのである。即ち

曰く——

『今や、聲・すがた・行爲に於て、日々すべての人類に、且つすべての有情の生に恵みを示すことに明かな、この愛と慈愛の眞の宗教は、人類の性格を形成することに於て、社會をすべての枝葉を通じて構成することに於て、又すべての人事を支配することに於て、全然新しい制度を創造するであらう』(三三八頁)。

眞宗教による新制度の創造——これこそオーエンの到達した結論なのであつた。

要するに、これら凡ては、空想的社會主義者達に共通の現象であつて、そこでは宗教批判は、結局徹底されなかつたのである。

第三章 ヘーゲル左黨の無神論

——フォイエエルバッハの無神論——

一、ヘーゲル及びヘーゲル左黨

『十八世紀のフランス哲學と並んで、また其れに續いて、新しいドイツの哲學が生じ、ヘーゲルに於てその頂點に達した。その最も大きな功績は、思惟の最高の形式としての辯證法の復活である』(エンゲルス『反テューリング論』弘文堂版、七頁)

全くヘーゲルは、『思惟の最高の形式としての辯證法』を集大成した點に於て、全哲學史上、また全辯證法史上、一つの輝しき位置を持つものである。然し、ヘーゲルに於ける辯證法は、觀念論的辯證法であつて、マルクスの所謂『逆立ち』辯證法である。従つて『吾々はヘーゲルを唯物論的に讀まねばならぬ』(レーニン)のである。即ち吾々は、ヘーゲルをヘーゲルとして讀むことを止めなければならない。吾々はマルクス主義への發展に於て

のみ、ヘーゲル辯證法を問題にするのである。その意味に於て、吾々は特にヘーゲル左黨を問題とする所以である。

その前に一言、ヘーゲル哲學に於ける致命的な矛盾を、エンゲルスの指摘によつて、述べやうと思ふ。即ち曰く――

「ヘーゲルは觀念論者であつた。即ち彼自身の頭腦の觀念は、彼にとつては存在する事物及び過程の多かれ少かれ抽象的な反抗としては表象されなかつた。反對に事物及びその發展は、彼にとつては、世界の創造以前から何處か知ら存在してゐる「理念」の現實性への反映としてのみ考へられた。このために凡てのものは、彼に於ては顛倒されてゐた。世界に於ける諸現象の現實的關聯は全く逆にされてゐた。ヘーゲルは諸現象の或る部分的相互關係を正しく、否な天才的に理解してゐたけれども、前述の理由によつて、多くのものは細密の點に於ては、つぎはぎで、人工的で、作りものたらざるを得なかつた。つづめて言へば、間違つたものとならざるを得なかつたのである。ヘーゲルの體系そのものは、巨大な片輪ものではあつたが、しかし此の種のものとしては最後のものではあつた。それに加

へてヘーゲルの體系は、解決すべからざる内的矛盾に悩んでゐた。即ち一面、この體系の基本的な前提は、人間史を發展的の過程とみとめる歴史觀であつたのであるが、この過程はその性質上、叡智の領域に於て所謂絶対眞理の發見によつて完成に達することの出來ないものである。他面この體系は、この絶対眞理がそつくり體系内に包含されてゐることを要求してゐる。すべてを包括する、究極的に完成した、自然及び歴史に關する知識の體系なるものは、辯證法的思惟の根本法則に矛盾する。この法則は、全世界の體系的認識が世代から世代へと巨大な進歩をなし得ると云ふ觀念を決して排斥するものでなく、反對にそれを包括するものである。」(エンゲルス「反テューリング論」弘文堂版、一四一―一五頁)。

かうしたヘーゲルに於ける觀念論的矛盾は、その右黨(die Rechten)をして、現存秩序の擁護者たらしめ、辯證法的方法の役割を糊塗することによつて、ヘーゲルの體系に於ける絶対理念の意義を前面に持ち出さしめたのであつた。

だが、他方それに反して、一八三〇年代及び四〇年代に於けるドイツの急進ブルジョアジイは、その理論者代表者として、所謂ヘーゲル左黨(die Linken)を持つた。即ちヘー

ゲル左黨（シュトラウス、パウエル兄弟、フォイエルバッツハ、等々）は、ヘーゲルの辯證法的方法を基礎として、ヘーゲルの體系を唯物論的に發展させ初めたのである。即ち本質的に云へば、ヘーゲルの體系を批判し始めたのである。而して此の批判こそは、フォイエルバッツハの唯物論哲學の中に、その一つの完成を見たのである。

當時のドイツに於ては、『政治といへば荊棘だらけの原野だつたので、勢ひ主要鬭争は宗教に向けられた』（エンゲルス「フォイエルバッツハ論」同人社版、三三頁）。即ち吾々は既に當時に於てさへ、かかる反宗教鬭争の××的意義を見出すことが出来るのである。

二、フォイエルバッツハの無神論

全くヘーゲル左黨の人々は、等しく反宗教理論を以つて立ち現れてゐるのである。先づ最初にシュトラウスは『イエス傳』（一八三五年）を投げつけ、次いでブルノー・パウエルは、福音書の物語全體が福音記者自身の創作に係るものだとした。

然し、フォイエルバッツハの『キリスト教の本質』（一八四一年）は、その決定的な文献で

あつた。それは『唯物論を文句なしに再び玉座に据え』た。マルクスもエンゲルスも、『一時は皆なフォイエルバッツハ信者だつた。』

かくしてフォイエルバッツハは、唯物論史上に重要な地位を占むることになつたのであるが、然らば彼の唯物論的宗教批判は、如何なるものであつたらうか？

フォイエルバッツハは、先づ、『神は自己に似せて人間を作つた』と云ふ傳統的觀念を蹴とばし、『人間が自己に似せて神を作つた』と云ふ定式を確立した。これこそ宗教批判に於ける彼の最大の功績であつた。即ち彼に於ては、神の觀念、即ち神の意識とは、人間自身の意識に外ならず、絶對的實體、即ち神なるものは、人間自身の實體に外ならなかつたのである。

かくしてフォイエルバッツハは、かうした彼れの立場からして、キリスト教に於ける奇蹟、天啓、三位一體、聖母、聖晚餐、等々の種々なる手品に對して、深刻なる解剖と、更らに嘲罵を加へてゐるのである。

かくフォイエルバッツハが、觀念的なヘーゲル哲學が偉大な専制者として君臨してゐた時

代に於て、傳來宗教と思辨的神學の全秘密を暴露したことは、實に偉大な貢獻であつたと云はねばならない。

然し乍ら、此のフオイエルバツハも、結局、新宗教の提唱に歸着したのみであつた。エンゲルスは後年に至つて、その『フオイエルバツハ論』に於て云ふ——

『フオイエルバツハは、宗教を毫も廢棄しようとはしない。彼は宗教を完成しやうと欲する。』（拙編『マルクス主義の宗教批判』六二頁）。

『フオイエルバツハは、交互の愛情の上に基礎を置く人間相互の關係、即ち性愛、友情、同情、献身などを、單に特定の——彼れから見れば過去に屬してゐる所の——一宗教に對する因縁なしに、それ自體に存在するものとして通用させずに、これらの相互關係は、宗教の名によつて淨められる時に始めて完全な資格を獲得するものであると主張してゐる。即ちフオイエルバツハにとつて肝心なことは、かう云ふ純人間的な聯繫が存在してゐると云ふことではなく、かう云ふ聯繫を新しい眞の宗教として理解すると云ふ點である。かう云ふ聯繫は、宗教的な刻印を捺された時に始めて完全なものと見做されると云ふのである。

宗教と云ふ言葉は“religion”から來たものであつて、本來「結合」を意味する。故に二人の人間の結合は、すべて宗教である。かう云ふ語原學的な小細工が、觀念論哲學の最後の方便となつてゐる。即ち宗教といふ言葉が、實際上の語用の歴史的進化から見て、何を意味してゐるか、と云ふのではなく、語原上から見て何を意味すべきかといふのが主眼となつてゐる。かくて性愛と性的結合とが一の「宗教」に祭り上げられるやうになる。只々それは、觀念論の思出にとつて大切な「宗教」と云ふ言葉を、言語を消滅させまいたためなのである。丁度これと同じことを、四十年代にルイ・ブラン一派のパリの改良主義者たちが口にしてゐた。即ち彼等にとつては、宗教のない人間は化物としか考へられなくて、吾々に向つていつもかう云つてゐた、「それなら無神論、それが取りも直さず諸君の宗教ではないか！」と。（拙編、前掲書、六三、六四頁）。

尙ほエンゲルスは、フオイエルバツハに於ける宗教的顛倒を、次の如く比喩的に嘲笑してゐる。曰く——

『フオイエルバツハが眞の宗教を、大體、唯物論的な自然觀の基礎の上に建設しようとする。

するのは、近代化學を眞の煉金術と解するのと違はない。宗教が神なしに存在し得るものとすれば、煉金術も賢者の石なしに存立し得やう。因みに煉金術と宗教との間には、非常に密接な聯絡がある。賢者の石は、神に類似した幾多の性質をもつてゐる』(同書、六四頁)。

青年時代のマルクス・エンゲルスに大きな影響を與へたフォイエルバッハも、要するに一個の急進的インテリたるに過ぎなかつた。フォイエルバッハに於ける根本的缺陷は、唯物論を社會現象に適用し得ないことであり、且つヘーゲルの觀念論と共に、その辯證法的方法をも放棄したことであつた。彼に於ては、かくして社會的發展が、彼の所謂「宗教」の外被に包まれてゐるのである。

だが、かうした不徹底な立場は、次いでマルクスに至つて、ハツキリと揚棄されてしまつたのである。以下、吾々は愈々マルクス、エンゲルスに於ける無神論を研究するであらう。

第四章 マルクス・エンゲルスの無神論

— 唯物史觀と無神論 —

一、唯物史觀の基礎觀念

吾々は愈々、マルクス、エンゲルスに於ける無神論の研究にまで達した。所で、それは直ちに唯物史觀の立場に於ける無神論の研究である。即ち史的唯物論又は辯證法的唯物論の立場に立つ無神論の究明なのである。

従つて吾々は、一應、マルクス主義の基礎たる、その唯物史觀なるものを、理解してからなければならぬ。それは一言にして云へば、下部構造たる經濟的機構——生産關係が、上部構造たる諸イデオロギー(觀念形態)を、自らに照應せしめて變革—廢棄するものなることを説明するものである。

今それに就て、マルクス自身の有名な公式的な言葉を引用するならば、次の如くである。

『人類は、その生活の社會的生産に於て、特定の、必然的な、彼等の意思に依存せざる諸關係を、即ちその物質的生産力のある一定の發展階段に適應する所の諸々の生産關係を與へられたものとして受取る。此等の生産關係の總體は、社會の經濟的構造を形づくり、これが實在的の基礎であつて、その基礎の上に法律的及び政治的の上部構造が立ち、その基礎に相應して特定の社會的意識形態がある。物質的、生活の生産方法は、社會的、政治的、及び精神的の生活過程一般を制約する。人々の意識が彼等の存在を決定するのではなく、むしろ反對に、彼等の社會的存在が彼等の意識を決定する。』(マルクス「經濟學批判」序文、傍點筆者)。

かくして精神的生活過程の一つたる宗教は、必然的に物質的生産方法によつて制約されることになるのである。これこそマルクス主義宗教批判の基礎であり、且つ此の觀點からして、マルクス主義に於ける云はゆる『宗教否定』が生れて來るのである。然し其れは、云はゆる單なる『宗教否定』でもなければ、また『宗教撲滅』でもない。否な、むしろ、宗教は其れ自體として『消滅』すべき運命下にあるものとされるのである。

註) マルクス・エンゲルスに於ける宗教批判の重要な殆んど全章句は、拙編『マルクス主義の宗教批判』(大東出版社刊)に収録されてゐるから、就いて見られたい。只その場合、初期の著作と後年の著作とを同一列に無吟味・無批判に讀むことは、注意すべきである。その故に、私は大體、編年史的に編んで、思想の發展を跡づけやうと試みて置いた。

二、宗教とは何か?

前にも述べた如く、一八四〇年代のドイツに於ては、政治批判は宗教批判の衣をまとつた。さうした情勢に於ては、正しく『宗教批判』こそは、一切の批判の前提をなすものである』(拙編『マルクス主義の宗教批判』三頁)。

かくして宗教の天上性は、ヘーゲル左黨、特にフオイエルバッハによつて、完全に克服されてしまつた。即ち『人間が宗教を作るのであつて、宗教が人間を作るのではない』と云ふことが、反宗教批判の基礎となつた。

然らば、云ふ所の宗教とは何か?

マルクスによれば、宗教とは次の如きものである。曰く、

『宗教は人間が自分自身を未だかち得てゐないか、或は既に得て再び失ひ果てた場合の自己意識と自己感情とである。』

『然し乍ら、人間と云つても、それは決して抽象的な、この世界の外に蹲つてゐる存在ではない。人間、それは即ち人間の世界のことであり、國家であり、社會である。この國家が、この社會が、宗教即ち顛倒した世界意識を作り出す。』と云ふ譯は、此等のものが一の顛倒した世界であるからである。

『宗教は、この世界の概論であり、その百科全書的摘要であり、その通俗的形式に於ける論理であり、その靈的名譽であり、その靈感であり、その道德的制裁であり、その儀式的補足であり、その慰安と辯明との全般的根據である。』

『宗教は、人間の本體の空想的實現である。何となれば、人間の本體は何等眞實の實在を有つものではないからである。(それ故に、宗教に對する鬭争は、間接には宗教を精神的香料としてゐるか、世界に對する鬭争である)。』

『宗教的苦難は、一つには現實的艱難の表現であると共に、また一つには現實的艱難に對

引用

○

する抗辯である。宗教は抑壓せられたる活き物の嘆息であり、又それが魂なき状態の魂であると等しく、それは無情の世界の感情である。即ちそれは民衆の阿片である。『同書四頁』即ち、マルクスに於ては、宗教は、『顛倒した世界意識』であり、『人間の本體の空想的實現』である。また其れは『抑壓せられた活き物の嘆息』であり、『魂なき状態の魂』であり、『無情の世界の感情』である。つまり宗教は民衆の阿片である、とされるのだ。

また宗教は、『現實的苦難の表現』として現れると共に、また『現實的苦難に對する抗辯』として現れるものである。だが此の場合の抗辯は、積極的な社會改革へと導かれるのではなくして、極めて消極的のものであつて、社會的に處理されんとするのはなくして、ただ單に個人的に處理せんとするものである。即ち貧乏も病氣も、すべて過去の宿業として觀ぜしめられ、小欲・知足・安分を以つて至富の妙諦なりとの教説を強ひるのである。

是の限りに於て、マルクスの宗教批判は、全くねらひに當つてゐるものである。あるがままの宗教に對するマルクス(並にエンゲルス)の批判は、反批判の餘地なきものであるだらう。

35



三、將來社會に於ける宗教の消滅

マルクス主義に於ける宗教批判の基礎をなす根本理論は、前述の如く、マルクス主義全體の基礎をなす唯物史觀の理論である。

従つて宗教の發生も存在も、以上の如く、唯物史觀の立場から立證されるのであるが、要するに宗教は、現實社會に於ける現實的苦難をその根基とし、その前提とするものである。而して資本主義社會に於ては、民衆の貧乏や病弱は、尙ほ充分に宗教を存立せしめてゐるのである。

然るに社會の發展法則は、辯證法的に現代の資本主義社會を揚棄して、明日の××主義を現出せしむる。それは唯物史觀に於ける歴史的必然である。かくして搾取なく、壓制なき社會が現れる。その時、『現實的苦難』は消滅する。かくしてその表現であり、抗辯たる宗教も亦、その必然性に於て、消滅するとされるのである。

かかる事情を、マルクスは『資本論』中に次の如き言葉で表現してゐる。曰く『現實界

の宗教的反射なるものは、總じて日常生活上の實際的事情が、人間相互間、並に人類對自然間の透明的に合理的な關係をば、日々人類の目に呈示するに至り、茲に初めて消滅し得るものである。』(前掲書、五一頁)。

エンゲルスは、その『反デューリング論』に於てより平易に、かつ明白に、次の如く述べてゐる。

『一切の宗教は、人間の日常生活を支配する外部的な力が人間の頭腦に幻想的に反映せるものに過ぎない。

『宗教は、人間を支配する外部的、自然的、及び社會的な力に對する人間の直接的態度、即ち感情的態度の一形態として、いやしくも人間が斯かる力の支配下に立つ限りは、存続することが出来る。

『若し社會が、全生産手段の掌握とその計畫的管理とにより、自分自身並に凡ゆるその成員を奴隸狀態から解放するならば——即ち彼等自身によつて生産され乍ら彼等に對して優越的な外部的力として對立する此の生産手段によつて彼等の現在陥れるその奴隸狀態から

解放するならば——若しだから、人間が最早や單に思想するのみでなく、指導をもするならば、茲に初めて、今日尙ほ宗教に反映してゐる最後の外部的力が消滅し、従つて宗教的反映、それ自體も亦、消滅する。けだし、それは最早や反映すべき何物もなくなつたと云ふ單純な理由からである。』(同書、五七、五八、五九頁、傍點筆者)。

以上の如く、マルクス及びエンゲルスに於ては、何等新宗教の提唱など決して爲されず、決定的に宗教の消滅が規定されたのである。

(註) 本章は頁數の關係から、甚だ不充分にしか説かれなかつたが、次章の「レーニンに於ける實踐的無神論」によつて幾分補充されるであらう。尙ほ直接に拙編「マルクス主義の宗教批判」中の原文を充分に讀破されんことを望む。

第五章 レーニンに於ける實踐的無神論

一、マルクス主義の發展としてのレーニン主義

レーニン没後に於けるソヴェート・ロシアの最高指導者たるスターリンは「マルクス主義の發展としてのレーニン主義」に就て、次の如く規定してゐる。曰く——

『レーニン主義は、××主義及びプロレタリア××の時代のマルクス主義である。より正確に云へば、レーニン主義は、一般的にはプロレタリア××の理論及び戦術であり、特殊的にはプロレタリア獨裁の理論及び戦術である』(スターリン「レーニン主義論」)。

全くラデツクが云つたやうに、嘗つて空想より科學へと發展した社會主義は、今や正しく科學より實行へと發展したのである。マルクス主義へのレーニン主義の史的發展は、云はば科學より實行への其れである。

従つてレーニンに於ける無神論は、より實踐的なものである事を特記しなければならな

い。また其の實踐的なる點にこそ、レーニン無神論の現代的重要性があるのである。

吾々は以下、マルクス・エンゲルスに於ける無神論が、レーニンに於て如何に實踐的、戰術的に發展せしめられてゐるかを瞥見しやう。

二、宗教及び神の概念

レーニンは、前述の如く、マルクス・エンゲルスの社會學說を、實踐的に發展せしめてゐるのである。従つてレーニンに於ける宗教批判も、極めて實踐的な、生々としたものである。

レーニンは、資本主義社會に於ける宗教の存在とその役割に就て、先づ次の如く述べてゐるのである。曰く――

『労働者の經濟的壓迫は、不可避にあらゆる種類の政治的壓迫と社會的窮乏とを惹き起し、作り出し、大衆の精神的・道徳的生活の野蠻化と萎縮とを導き出す。労働者はその經濟的解放のための闘争に何程かの政治的自由を戦ひ取ることが出来る。だが、資本の權力が動

搖しない限り、如何なる自由も彼等を貧困と失業と隸屬とから救ひ出さなう。宗教は、他人のための永久的労働によつて、困苦と孤獨とによつて抑壓されてゐる人民大衆を至る所て重壓してゐる精神的壓迫の一種である。搾取者に對する闘争に於ける被搾階級の無力が不可避的に來世に於けるより、善き生活への信仰を起す。これは丁度、自然との闘争に於ける野蠻人の無力が諸神、惡魔、奇蹟、其他のものを呼び起すのと同じである。宗教は、一生涯、働いて苦しみ抜く人間に對しては、地上に於ける屈從と忍耐とを教へ、天國の報いの希望を以て慰める。だが、宗教は、他人の労働によつて生活する人間に對しては、搾取者たる彼等の全存在を安々と是認し、天國の祝福の入場切符を相當の値段で賣渡し、かうして彼等に地上での幸福を教へてゐる。』(拙編『マルクス主義の宗教批判』一〇五、一〇六頁)。

かくレーニンは、一層具體的に、現實的な社會に基礎を置いた宗教批判を展開せしめてゐるのである。

次いでレーニンは、マルクスによつて始めて道破された、かの有名な『宗教は民衆のた

めの阿片である』と云ふ定式を全部的に承認して、次の如く述べてゐる。

『宗教は民衆のための阿片である。宗教は資本の奴隸がその人間的容貌や、最少限の人間的生存慾を溺死させてしまふ一種の精神的毒酒である』(同書、一〇六頁)。

また曰く——『宗教は民衆のための阿片である——と云ふ此のマルクスの原則は、宗教問題に於けるマルクス主義の全世界觀の主要點である。マルクス主義は、すべての今日の宗教及び教會、ありとあらゆる宗教團體を以つて、常に労働階級の搾取と魔酔との支持に勤むるブルジョアの反動の機關であると見るのである』(一一五頁)。

次に神とは何か？

レーニン^イは次いで、ゴリキー^イに與へた手紙の中に於て、神なる觀念を分析して、次の如く述べてゐる。曰く——

『神とは、歴史的にも亦實際的にも、何よりも先づ、人間の魯鈍な被壓迫性と外界の自然と階級抑壓とを通じて生み出された諸々の觀念——この被壓迫性を強固にし、階級闘争をごまかし去らうとする所の諸々の觀念——の複合體なのである』(同書、一五九頁)と。

かくして『一切の創造は、個人的觀點でなしに、社會的觀點から見る時、魯鈍な小ブルジョア階級の、脆弱なる俗物どもの、絶望し、困惑せる、夢想的な、自己面唾しつつある素町人と小ブルジョアの、甘たるい自己觀察以外の何物でもない』(同書、一五三、一五四頁)のである。

以上の引用によつて、レーニンに於ける宗教及び神の概念が、如何に階級的に取扱はれてゐるかが充分に解るであらうと思ふ。

三、宗教の社會的起源

レーニンに於ける實踐的無神論は、また極めて明解にブルジョア社會に於ける宗教の社會的起源を説明し得てゐる。

即ちレーニンは曰ふ——

『マルクス主義は唯物論である。唯物論としてのマルクス主義は、第十八世紀の百科全書^イ學者の唯物論、又はフオイエルバッハの唯物論と同様に、宗教に敵對的である。然しマル

クス及びエンゲルスの辯證法的唯物論は、唯物哲學を歴史に、社會科學に應用することによつて、百科全書學者及びフオイエルバッハよりも先へ進む。吾々は宗教と闘はねばならぬ。それは全唯物論のイロハであり、従つてマルクス主義のイロハである。けれどもマルクス主義はイロハに止つてゐる唯物論ではない。マルクス主義は一層先へ進む。マルクス主義者は云ふ。吾々は宗教を克服することを知らねばならぬ。そしてそれが爲に吾々は大衆に於ける信仰及び宗教の起源を唯物論的に説明することが出来なければならぬ』(同書、一一九、一二〇頁)

かくして宗教に對する闘争は、宗教の社會的根源の除去を目的とする階級運動の具體的實踐と關聯されねばならない。ブルジョア社會に於ける宗教の存在は、決して『民衆の無智のため』ではない。もつと本質的な理由があるのである。即ちレーニンは、それを次の如く明示してゐるのである。曰く――

『近代資本主義諸國に於ては、宗教の起源は、主として社會的起源を持つてゐる。勞働大衆の社會的壓迫、資本主義の盲目な力の前に於ける彼等の明白なる絶對的無力、日々刻々

普通の勞働する人々に加はる、戦争、地震、等の如き凡て非常の事變よりも千倍も恐るべき驚くべき苦痛——これらのものの中に宗教の深い今日の起源は求められるべきである。

「恐怖が神々を創造した。資本の盲目的權力の前に於ける恐怖、盲目的恐怖(けだし其は人民大衆によつて豫定されないから)、プロレタリア及び小ブルジョアを一步一步脅威して、彼等に突然の・豫期せざる・偶然的・窮乏を、没落を、乞食・窮民・淫賣婦への轉化を、齎らすことが出来、彼等を餓死に委ねるところの恐怖——これが即ち、若し唯物論者が唯物論の幼稚園にかぢりついてゐるたふなと思ふならば、彼等が第一に、また最も記憶して置かねばならぬ所の近代的宗教の根源である』(同書、一二〇、一二二頁)

マルクスによつて『涙の谷の聖影』と規定された宗教、また『現實的苦難の表現』とされ、『抑壓された生物の嘆息』とされた宗教、その宗教の根源は、如上の引用によつて、適確なる具體的・實踐的な説明が附與されたものと云へやう。

そしてマルクス・エンゲルスに於ける『宗教の死滅』の説は、レーニンに於ても至る所に述べられてゐる。

四、プロレタリア宗教政策

(a) 宗教は私事か？

ドイツ社会民主黨の綱領には『宗教は私事なり』との規定が表明されてゐる。かくして宗教は個人心意の問題として、個人の私事としての信仰の自由を積極的に許容し、従つて宗教自體の存在を容認する日和見主義的見解が生れた。それに對してレーニンは、次の如き批判を加へてゐる。曰く――

『宗教は社会主義的プロレタリアートに對しては、毫も私事ではない。我々の黨は、階級意識ある先驅的闘争者が労働階級の解放のために團結したものである。かくの如き團體は階級意識に對し、宗教的信仰の無知と謬想とに對し、無關心であることは出来ない。吾々が教會と國家との完全な分離を要求するのは、宗教的迷蒙に對し、純粹に精神的な、單純に精神的な武器を以て、吾々の出版物を以て、吾々の言葉を以て、戦ふことが出来るやうにするためである。然し吾々は、吾々の團體、即ちロシア社会民主労働者黨を、何より

も正に労働者の凡ゆる宗教的愚蒙を克服する闘争のために創立したのである。吾々にとつて精神的闘争は毫も私事でなく、全黨の、全プロレタリアートの事項なのである。』(同書、一〇九、一一〇頁)。

當時の社会民主黨が宗教を私事と考へるのは、國家に關してであつて、決して一個人に關してではなかつた。即ち國家から宗教を分離することに關してであつた。宗教がマルクス主義者に對し、労働者に對して、私事であると云ふのでは決してなかつたのである。

(b) 反宗教運動の眞意義

プロレタリアートは宗教的愚蒙を克服するために闘争せねばならない。しかし、それは『資本の暗黒な権力に對する彼等自身の闘争を通じて啓蒙せずして、單に小冊子や宣傳によつては、何人もプロレタリアートを啓蒙することは出来ない』(一一二頁)のである。

即ち眞にプロレタリア的な反宗教運動は、宗教の社会的根源そのものに對する闘争なくしては遂行され得ないものである。

だが、此の際、注意すべきことは、反宗教宣傳の云はば技術的方面である。レーニンは注意深く、「古い偏見の殘存物」を信じてゐるプロレタリアに對する公式的な反宗教宣傳の無意味であること、且つ徒らに戰線を亂すものであることを、指摘し、警戒してゐる。

即ちレーニンは、政治闘争を第一義的とする立場からして、反宗教闘争は第一面に押し出さるべきものでないとし、次の如く述べてゐる。

「これこそ、吾々が綱領中に吾々の無神論を明記せず、且つ明記することを許されない理由である。これこそ、吾々があれこれの古い偏見の殘存物を信じてゐるプロレタリアに我が黨への接近を禁じない、また禁ずることを許されない理由である。吾々が何れかのキリスト教徒の不徹底を克服するために科學的世界觀を宣傳することは、吾々にとつて缺くべからざることである。だが、これは決して吾々が宗教問題をその出る幕でない第一の場所に押し出さねばならぬと云ふことを意味しない。それは決して眞に××的な經濟的・政治的闘争の諸力を第三義的な意見や荒唐な空想のために分裂せしむることを許すことを意味しない。これ等のものは迅速に、凡ての政治的意義を失ひ、そして經濟的發展自體の過程

を通じて迅速に屑部屋に投げ込まれるであらう」(一一二頁)。

尙ほレーニンは、次の如き極めて教訓的な例を擧げて説明してゐる。曰く——「或る場所の或る産業部内の労働者が、例へば勿論無神論者である所の、可なり自覺せる社會民主主義者の層と、未だ村落及び農民と結びついてゐる所の、神を信じ、教會に行き、全く未だ、例へば、キリスト教労働組合を設立した町牧師の直接的感化の下にあるところの、可なり後れた労働者とに分れてゐるとせよ、更に又、經濟闘争が此の町に於てストライキを喚起したと假定せよ、マルクス主義者は無條件にストライキ運動の成功を第一位の仕事にせねばならない。そしてこの闘争に於て労働者が無神論者とキリスト教信者とに分離することに決定的に反對せねばならない。熱心にかやうな分離を克服せねばならない。無神論宣傳は、かう云ふ情勢の下に於ては、餘計なことであるのみならず、有害となり得る。即ち、それは後れた層を尻込みさせないため、投票を失はないため、等々の俗物的立場からではなく、階級闘争の現實的進歩の立場からである。この階級闘争こそ、近代資本主義社會の狀態に於ては、赤裸々の無神論的宣傳より百倍もより良くキリスト教労働者を社會民

主黨及び無神論に齎らすであらう』(一二三頁)。

また、次の如くにも云はれてゐる——『吾々は、神に對する信仰を維持してゐる所の全ての労働者を單に加入させるのみならず、熱心に彼等を引きつけねばならない。吾々は彼等の宗教的感情を些かでも侵害することに絶対に反對するが、然し吾々の精神で教育するために彼等を獲得するのであつて、彼等の宗教的感情に對して積極的に闘争するためではない』(一二六頁)。

茲に、吾々は、眞のマルクス主義的宗教政策の基調を發見するものである。そしてレーニンの實踐的無神論が、戰術的見地からして、如何に勝れたものであるかを知ることが出来る。

尙ほレーニンは、嘗つてエンゲルスによつて指摘された所のブランキー主義的な『宗教に對する騒々しい宣傳』の愚劣であること、それが却つて『宗教に對する興味を復活し、宗教の實際の死滅を困難ならしめる最善の手段である』ことを、ハツキリと認めてゐる。(一二五、一二六頁)。

同時にレーニンは、宗教に宣戰する無政府主義的空語を、極度に罵倒してゐる。即ち、『あらゆる犠牲を拂つて神に對する戦争を説教する無政府主義者は、實際に於て、牧師とブルジョアジーとを援助するのみであらう。(無政府主義者が又實際に於て常にブルジョアジーを援助する如く)。(一二四頁)とレーニンは云つてゐる。

即ちレーニンに於ける實踐的無神論は、無計畫な・絶望的な・アナキストの反宗教運動とは全く別に、極めて理論的・實踐的な戰術を伴つてゐるものである。

(c) 宗教家に對する對策

レーニンに於ける宗教家に對する對策の一端として、吾々は次の如き言葉を見出すことが出来る。

『吾々社會主義者は、僧侶のなかの正直な人間の要求を最後まで展開せしめ、その語る所を聽き、宗教と警察とのあらゆる結帯を決定的に引裂いてしまふことを彼等に要求し、以てその運動を支持せねばならぬ。僧侶諸君が誠實にやるとすれば——其時、諸君は教會と

國家、教會と學校との完全なる分離に賛成せねばならない。宗教が無條件に、何等の制限なしに私事として宣言されることに賛成せねばならない。若し然らずして、諸君が自由のための此の徹底的な要求を受け入れないとすれば——その時、諸君は宗教審判法の傳承の中に依然として捕へられてゐるわけであり、かくして國家からの僧録扶持に依然かぢりついでゐるわけであり、諸君は諸君の武器の精神的力を信じないのであり、かくしていつまでも諸君は國家權力から買収されてゐるわけである。かかる場合に於ては、ロシアの階級意識ある労働者は、諸君に對して忌憚なき戦争を宣言するであらう』(一〇九頁)。

尙ほ進んでレーニンは、僧侶がプロレタリア黨の黨員たり得るかどうかと云ふ問題に就ては、次の如く述べてゐる。

『若し僧侶が、共通の政治的事業のために吾々の所へやつて來て、黨の綱領を犯すことなく、黨の事業を眞面目に遂行するならば、吾々は彼を社會民主黨の隊伍に取り入れることが出来る。と云ふのは、吾々の綱領の精神、及び基礎と宗教的信念との對立は、かう云ふ情勢の下に於ては、たゞ彼一人に關することであり、彼の個人的事項に止るからである』

(一二五頁)

しかし『僧侶が社會民主黨内に入りこんで來て、殆んど彼の獨占的な、そして最も重要な事業として、活潑な宗教宣傳を黨内で行はふと欲するならば、黨は無條件に彼を除名しなければならぬであらう。』(一二六頁)。

かうしたレーニンの實踐的無神論に基礎を置く宗教政策の展開こそ、今日、ソヴェート同盟に於ける現實的な宗教政策なのである。

(附記) レーニンの實踐的無神論こそ、今日、最も重要性を持つものとして、もつと評論されるべきものであるが、頁數の關係上、今回はこれで止める。詳細は直接、レーニンの宗教論を披見されたい。——尙ほレーニンの文中に出て來る「社會民主黨」は「××黨」の前身の其れであつて、今日の其れではないことを附記して置く。

第六章 アナーキストの反宗教思想

一、序 説

吾々は既に、レーニンの實踐的無神論に至る迄の史的發展を眺め終つたのであるが、尙ほ若干、附隨的に記述すべきものを持つのである。

それは先づ、アナーキストの反宗教思想に就てである。此の無政府主義の運動は、今日では極めて微弱なものであるが、嘗つては非常に強大な力を持つてゐたものであつて、廣汎にプロレタリア層に影響を與へてゐたものである。

一言にして云へば、アナーキストの反宗教運動は、その一般行動と同様に、無計畫的で、絶望的なものである。それ故にこそ、前にも述べた如く、レーニンは、宗教に宣戦するアナーキスト的空語を、極度に罵倒してゐる。そしてレーニンは云つた。

『あらゆる犠牲を拂つて神に對する戦争を説教する無政府主義者は、實際に於て、牧師と

ブルジョアジーとを援助するのみであらう。實際アナーキストが常にブルジョアジーを援助してゐるように』と。

だが、かゝるアナーキストの反宗教的空語とは、どんなものであらうか？

以下、吾々は、いはゆる『三大アナーキスト』を以て稱せらるゝブルードン、バクーニン、クロボトキンの三者に就て、その反宗教思想（無神論）を概観するであらう。

一、ブルードン

『アナーキズムの父』と稱せらるゝ、純労働者上りの此のフランスの偉大な社會思想家は、如何なる宗教觀を持つてゐたか？

ブルードンは、彼の中心思想を、嘗つて次のやうに格言的に表現した。

『財産、それは盗みである。

神、それは悪である。

最善の政治、それは無政府である。』

即ちブルードンは、經濟、宗教、政治の三大項目を批判し、「神こそは悪なり」と断定した。

簡單ではあるが、極めて明白に、ブルードンの反宗教思想が、これで理解されるであらう。

三、バクーニン

右のブルードンの反宗教思想を特に發展せしめたものは、誰れあらう、ロシアの貴族の出身で、『實行のアナーキスト』と稱せられたミカエル・バクーニンその人であつた。

即ちバクーニンは、宗教と國家との二つを極力攻撃した。彼の代表的著作は、實に『神と國家』と云ふのである。勿論この著作とても、彼の他の諸著作と同様、決して系統立つた著作ではないが、然し生々とした斷片的な警句を拾ひ出すことが出来る。

先づ、バクーニンは、信仰の愚昧さを嘲笑してゐる。曰く――

『……「不合理なるが故に吾れ信ず」(Credo quia absurdum)。此の言葉を繰り返へさね

ばならないのは、云ふまでもない。そこで一切の議論は止んでしまふ。信仰の愚昧が凱歌をあげる外に、何ものも残らない。……』(『神と國家』ドイツ語版、二〇頁)。

かくして、バクーニンによれば、酒場と教會とは同一視されるべきものである。即ち酒場は肉體を蕩かし、教會は心靈を蕩かすと云ふのである。

尙ほ進んで彼は――『社會改造のみが、能く凡ての酒場と教會とを同時に閉鎖してしまふ力を持つてゐる』(二二頁)と云つてゐる。

更にバクーニンは、ヴォルテールの云つた言葉――即ち『若し神と云ふものが存在しないならば、吾々は其を發明し出す必要がある。何故なら、云ふまでもなく、民衆に取つて宗教は必要だからである。宗教は安全瓣だからである』(二二頁)と云ふ言葉を引用して、次の如く逆用してゐる。曰く――

『私はヴォルテールの句を逆にして「若し神が眞に存在するならば、それは廢棄する必要がある」と云ふであらう。……』(三二頁)。

またバクーニンは、教會がブルジョアジーの手先であることを説いて、次の如く云つて

る。

「……(ブルジョア革命は、一度は教會を壊崩せしめたが、再び其を建立した。何故なら)、ブルジョア階級は、その地位を保持して行く必要から、また新たに得た財産を保持して行くために、不満足であり、且つ飢餓に瀕してゐる所の民衆を宥めるために、天上の神餐を約束することが必要であつたからである。……」(七九頁)。

かくして今や、彼れバクーニンは、僧侶及び教會の不必要を説くのである。宗教は科學によつて代られ、教會は學校(むしろ民衆アカデミーと云つたものになる——四二頁)に代はるのである。國家が民主國へと呼び換へられると同じように。

以上が、バクーニンの主著『神と國家』に現はれた反宗教思想の概要である。

x

彼れバクーニンは、尙ほ一八七〇年九月六日附の書簡に於て、『農民に對する労働者の主たる苦情』なるものを三つ數へてゐるが、その第一として、次の如く云つてゐる——『農民は無智で、迷信深く、頑迷で、そして僧侶に指導されてゐる』と。またその第三には

『彼等(農民)は氣違ひみた信徒である』と云つてゐる。(『バクーニン著作集』フランス版、第二卷、九三頁)。

以上によつて、吾々は、バクーニンに於ける反宗教思想が、如何なるものであつたかを知り得るであらう。

四、クロボトキン

更に今一人の偉大なるアナキストたるピーター・クロボトキンの反宗教思想を見やう。クロボトキンも亦、ロシアの貴族の出身であるが、彼は特に、宗教の名に於てなざる、多くの偽善を憎んで、次の如く述べてゐる。

『彼等(社會運動家)は、情緒の心理的必然である單純誠實な宗教的信仰は攻撃することは決してなかつたが、宗教の面を被つて民衆を導かうとする偽善に對しては、絶えず其を無益な重荷だと云つて容赦なく其れと戦つた。……』(大杉譯『革命家の思出』三六三頁)。

クロボトキンの態度は、全體として、バクーニンの其れよりも、甚だしく科學的であつ

たことは、一般に知られてゐることであるが、かうした簡単な叙述の中にも、その片影が現れてゐると云へよう。

五、結 言

實際、アナキズムは、今日では殆んど世界的に大なる力を得てゐない。かつてバクーニンを中心として、第一インタナショナルの時代に、マルクスと對立した當時のアナキストの運動は、可なり花々しいものであつた。

また、アナキズムが労働組合運動の地盤に根を下して生み出したサンヂカリズムの如きも、ヨーロッパ大戦までは、非常な力を持つてゐたものであるが、今やロシアにソヴェトト國家の建設と云ふ實物が浮び上るに至つて、すべては清算されんとしてゐるのである。だが、それにも拘らず、否なそれ故にこそ、アナキストの反宗教思想も、一應は紹介され、検討の對象とされねばならないであらう。

第七章 日本に於ける無神論

一、序 説

吾々は、既に前數章にわたつて、ヨーロッパに於ける近世無神論の史的發展を瞥見するところがあつた。

そして其處に一貫して、マルクス主義的無神論の史的發展を中心に、不完全ながらも、一應の記述をなし得たかに思ふ。

然らば、思想に國境なく、日本も亦、甚だしくヨーロッパ思想の影響下にあるの實相からして、かかる無神論思潮が如何に日本に反映し、發展したかを見ることは、吾々の無神論史の研究の末章として、極めて重要なものであらうと思ふ。

吾々は今、日本に於ける無神論の發展を述べるに當つて、明治維新後に於ける斯かるヨーロッパ思想の影響下に現はれた際立つた思想家の若干を擧げて見やう。

二、加藤弘之

明治時代に於ける最初の無神論者は、加藤弘之であつたと云へやう。彼がキリスト教を攻撃した諸著書や、彼の自然、社會、政治、倫理等に關する思想を述べた著書は、ヘツケル流の生物學的唯物論に立脚するものであつた。且つそれは支配階級たる新興のブルジョアジーを擁護するを以つて目的とした御用哲學ではあつたが、尙ほ一つの有力な唯物論的・無神論的思想であつた。(註一)

(註一) 佐野學「宗教論」七六頁。尙ほ加藤弘之は天保七年(一八三六年)但馬に生れ。大正五年(一九一六年)八十一才の高齡にて東京に死す。彼は明治時代初中期に於けるドイツ流進歩思想の代表者であつた。文學博士、法學博士、東大總長、貴族院議員、樞密院顧問官、男爵などの榮譽を兼ねた。

三、中江兆民

明治時代の最も代表的な無神論者は中江兆民であつた。

中江兆民の無神論は、特に哲學的な基礎を持つてゐた。彼は明治初年にフランスに留學し、當時に於ける世界での最も進歩せる思想的中心地巴里に遊んで、充分に進歩思想を吸入して來たのであつた。

一言にして云へば、中江兆民の思想は、フランス唯物論の流れを汲んだものであつた。即ちそれはブルジョア急進主義の最も深い哲學的表現であつて、自由黨左翼を代表し、社會主義への立派な先驅者の聲であつた(註一)。

中江兆民の唯物論は、必然的に、その中に無神論を包含してゐた。明治三十四年に刊行された彼の著書『續一年有半』は、一名『無神無靈魂論』と題されてゐた。而かも本書は、一年有半の壽命しかないと醫師に死刑を宣告されて、死に直面しつつ書き上げたものであつて、本書はそのためにも、非常に洛陽の紙價を高からしめたものであつた。それは正に『翼なくして飛んだ』ものであつた(註二)。

本書の中で、兆民は敢然と無神論を宣明してゐる。即ち曰く——

『生れて五十五年、稍や書を読み理義を解して居ながら、神が有るの、靈魂が不滅と云ふ

やうな囁語を吐くの勇氣は、余は不幸にして所有せぬ」と。また曰く「余は斷じて無佛、無神、無精魂、即ち單純なる物質的學說を主張するので有る」と（註三）。以つて兆民の斷乎たる無神論者たりしことを知るべく、また彼が明解な唯物論者であつたことを知るべきである（註四）。

また別の機會に、兆民は邪教や迷信などの禁絶を説いてゐる。即ち曰く——
「卜筮、觀相、風角、巫祝、及び諸種佛神護符の類、其人事に害し、並に人の神智を傷むこと極めて大なり。此等徐に法を設け、多少の猶豫期を與へて之を禁絶す可し。其他天理教、金光教會等、淫祀の屬、皆此の一例に依り之を禁絶す可し」と（註五）。

だが、かうした所謂『ナカエニズム』は、惜しい哉、その哲學を直接に繼承發展せしめるものが無かつた。

（註一） 佐野學「マルクス主義と無神論」九頁。

（註二） 改造文庫「幸徳秋水集」七六頁。

（註三） 中江兆民「續一年有半」四、五頁。

（註四） 中江兆民は本名を篤介と云ひ、弘化四年（一八四七年）、土佐高知に生れ、明治三十五年（一九〇二年）、五十五才を以つて東京に歿した。

中江兆民の唯物論一般に就ては、佐野學著「唯物論哲學としてのマルクス主義」附録「明治時代に於ける輝ける唯物論者」（上野書店刊）、及び杉山榮氏の好論文「中江篤介の唯物論に關するノート」（「社會學徒」昭和五年二・三・四月號）等を参照のこと。

（註五） 「一年有半」五五、五六頁。

四、幸徳秋水

中江兆民の『門人』たる幸徳秋水は、その病間並びに獄中の筆になる最後の著書たる『基督抹殺論』（明治四十四年發行）に於て、その無神論を發展せしめた。彼の晩年の思想は特に米國漫遊後、極左アナキズムの色彩を帯んでゐた。

本書に於て、彼は積極的に、バイブルの虚妄なることを細々と考證的に論究してゐる。そして進んで、かの十字架の如きは、生殖器の表號の變形なることを論斷してゐる。而して次の如き宣言を以つて、卷末の辭としてゐる。曰く——

『基督教徒が基督を以つて史的人物なりとし、其傳記を史的事實となすは迷妄なり、虚偽なり。迷妄は進歩を礙げ、虚偽は世道を害す。斷じて之を許す可らず。即ち彼が假面を奪ひ、粉粧を剥ぎて、其真相實體を暴露し、之を世界歴史の上より、抹殺し去ることを宣言す。』(註一)

勿論、此の研究は、可なりに實證的ではあるが、未だ充分に科學的な立場に立つものではない。否なむしろ、徒らに奇矯の言をもてあそんだものであるかの如き感なきにしも非ずである。従つて、かかる反宗教論は、充分に大衆化するに至らなかつたと見ねばならぬ。

加藤弘之に初まり、中江兆民によつて普及された明治時代の無神論は、かうした幸徳秋水の基督抹殺論を境として、次いで大正〓昭和時代となり、次第にマルクス〓レーニン主義的無神論の國際的波濤の押し寄せが現實化されるのである。而して現代の如き怒濤狂亂の渦巻を現出し、文字通りにスツルム・ウント・ドラングの時代に突入することになつたのである。

然らば、その思想的先驅として擧げらるべき人は誰れであつたか？ 以下それを説かう。

(註一) 『基督抹殺論』一四七頁。——尙ほ幸徳秋水は本名を傳次郎と云ひ、明治四年土佐に生れ明治四十四年一月二十四日、四十一才にて刑場の露と消えた。

五、佐野 學

さて、マルクス〓レーニン主義的無神論は、日本の現段階に於ても、國際思潮の一翼として、最も基本的な反宗教思想をなして居り、昨今、日本プロレタリアートの廣汎な文化闘争の一翼として、その重要な役割を演じつつあるものである。即ちそれは日本現時の反宗教運動の指導原理として、力強く登場せしめられてゐるのである。

而して之は、マルクス〓レーニン主義の一般的普及による結果として、必然的に反宗教闘争も亦、階級闘争の一議事として、プロレタリアートの日程に上され來つたわけである。即ち現段階に於ける文化反動は、必然的に宗教の意識的反動化を來し、茲に反宗教理論に於ける闘争も亦、甚だしく活潑となり來つたのである。

而して、かかる新興の無神論に於て、その理論的先驅であり、指導的立場をとつた人は正しく佐野學氏であつたと云はれよう。

佐野氏は云ふ——『わが國に於ては、無神論も唯物論も、從來大なる發達をしてゐないといひ得る。これは日本の經濟及び政治の歴史から生じた結果である。わが徳川時代における哲學思想は、封建的な倫理學や空想的な宗教哲學が主であつた。明治維新後になつても、ブルジョアジーが進歩的役割を果たす事が少く、迅速に帝國主義的ブルジョアジーに變化した結果、その哲學思想は觀念論が主要潮流であり、近來において特にそれが甚しい。……西歐におけるブルジョア革命期の進歩的ブルジョアジーを代表する、唯物論的思想潮流は吾國において發達しなかつたし、若くは萌芽だけで凋落した。しかるにプロレタリアートの唯物論も無神論も、ブルジョアジーのそのの繼承發展に外ならない。この結果として吾國においては宗教的迷信はなほ深く大衆の間に残つて居り、神秘ならざるものが依然として神秘化され、人間的なもの、自然的なものが、非人間的、超自然的に觀念されて居り、かかる宗教的觀念的迷蒙の當然の結果として、政治生活の進歩を阻害してゐるので

ある。マルクス主義者は唯物論者であり、無神論者でなければならない。』(註一)

かうした立場かして、同氏は『マルクス主義と無神論』(昭和二年)及び『宗教論』(昭和四年)などの潑刺たるパンフレットを出版して、廣くマルクスレーニン主義の無神論を展開してゐる。特に『宗教論』に於ては、次の如く明解なる批判が展開されてゐる——

『制度としての宗教は、いかなる社會的機能を持つてゐるか? それは民衆の現世的苦痛現世的不平を鎮靜して彼岸世界の幻想に溺惑させ、現世において地上の樂園を建設せんとする民衆の階級闘争を抑壓することに在る。宗教制度は階級的支配の要具に外ならない。教會寺院はそれ自身、一の搾取機關であり、全搾取機關の一部であると同時に、搾取の全機構の擁護者である。僧侶はそれ自身、搾取者であると共に、民衆の搾取者への反抗を眠り込ませるための説教者である』(註二)

かくして同書の結論として、日本の宗教問題について重要なモメントが指摘されてゐる。そして最後に次の如く結ばれてゐる。

『わが勞働大衆の先頭隊たるプロレタリアートは、今や宗教に對して積極的態度を採らざ

るを得なくなつたのである。即ち彼は一切の宗教的幻想を批判し克服して、マルクス主義的世界觀を愈々強く戦ひとると共に、また一切の反動勢力との闘争の一環として、僧侶、牧師の反動的な政治的勢力を粉碎せねばならなくなつた。』(註三)
かくして今や、日本に於ける無神論は、國際的水準に達し、その普及と影響とは可なり
に廣汎なものである。

(註一) 「マルクス主義と無神論」序、一一二頁。

(註二) 「宗教論」三〇頁。

(註三) 「宗教論」七九—八〇頁。

後編 反宗教運動の史的發展

第一章 フランス大革命と反宗教運動

一、序 説

一七八九年に勃發したフランス大革命は、封建制度を崩壊せしめ、近代ブルジョアジ
の政權を確立したものであつた。

此の社會的變革過程に於て、宗教は如何なる過程を辿つたか？

吾々は先づ、マルクスの女婿ラファルグによる要約的批判を手引きとして引用しよう。

「一七八九年の革命的ブルジョアは、フランスを非キリスト教化し得ると考へて、比類な
き苛酷さを以つて、僧侶を迫害した。最も理論的な人々は、神に對する信仰が存續する限
り何事をも爲し得ないと考へて、王黨官吏と同じように、法令によつて、神を廢止し、之

に代ふるに理智の女神を以つてした。然るに革命のほとぼりが醒めるや、ロベスピエールは、法令によつて至高の存在 (Être Suprême) —— 神といふ名稱が未だ具合が悪かつたので——を再興した。そして、數ヶ月の後には、僧侶たちは、彼等の隠れ家を出て、教會を開き、信徒が其處に殺倒した。ボナパルトは、ブルジョアの平民を満足させるために、コンホルダ (Concordat) —— ローマ法王との和親條約 —— に署名した。かくてシャトーブリヤンが勝利せるブルジョアの趣味に適ふように調理したロマンチツクな・センチメンタルな・ピトレスクな・マカロニー式な・キリスト教が生れた』(Lafargue, Le déterminisme économique de Karl Marx, p. 290.)

エンゲルスも亦、フランス革命の結果に就て、次の如く云つてゐる——

『先きに宗教を嘲笑した自由思想家が、追々と外面的に敬虔な行狀を示し、教會なり、その教義なり、儀式なりを馬鹿にせぬようになり、止むを得ざる限りは教義や儀式を守ることにさへなつて來た。……』

『彼等は唯物論を非難し出した。宗教は人民のために維持されねばならぬ。それが社會を

滅亡から救ふ唯一最後の手段だと云ふのである。然し乍ら、彼らは不幸にも、宗教を破壊し盡すことに全力を注いだ後になつて、初めて右の事を發見したのである』(拙編「マルクス主義の宗教批判」九四・九五頁)。

然らば、フランス革命に於いて、反宗教運動は實際に如何に展開されたか？

以下、簡単にそれをスケッチしてみやう。

一、教會財産の收用

フランス大革命の憲法議會は、無補償で中世紀的な十分の一税 (收獲の十分の一を教會又は領主に上納するもの) を廢止して、教會の所有權に打撃を與へた。しかし乍ら、土地に手をつけることは、可なり大膽なことであつた。教會は十分の一税の廢止には僅かに無氣力な反對をしたに過ぎなかつた。しかし、不動産の國有化に對しては、狂暴な力を以つて反對する氣勢があつた。

しからば、憲法制定議會は、聖職者の財産の收用を如何に辯明したか？

議會は、教會の財産が他の財産と同じ性質を持たないこと、教會が土地及び家屋を、或る職責、特に慈善及び救護を行ふためにのみ受けたこと、従つて國民自身がその職責を盡す時には、國民はその責任を擔當した財源を收用する權利を有することを斷言した。

そして遂に議會は、その法律的論證を完備するために、聖職者は階級を作ることの停止された後に、その資格で物の所有が出来ないこと、國民は彼自身によつてのみ存在するに過ぎない團體の財産を、常に收用し得ることを聲明したのであつた。(ジャン・ジョレス「フランス革命史」第二卷 邦譯、九一頁)。

三、宗教團體法

しかし國會は、教會財産を收用し、且つ分配することだけに止まることは出来なかつた。國會は、革命によつて創造された新社會と教會との關係の總體を規則立てねばならなかつた。即ち憲法制定議會は、教會組織に無關係ではあり得なかつた。(同書、二一九頁)。

一七九〇年七月十二日、即ちバスチーユ占領の最初の記念日及び武装團結祭の二日前、

宗教團體法が決定的に可決された。

そして一七九〇年八月十日、立法議會は次の如き布告を發布した。

『本年十月一日に、現在修道士又は修道尼の住む一切の修道院は、右の修道士又は修道尼に依り明渡さるべし。且つ所管官廳に依り競賣に附せらるべし。』

これは確かに、宗教生活の消滅が宣言せられたものであり、且つ憲法議會によつて制定された原則の斷乎たる適用であつた(同書、二二三頁)。

そして賣却の必要機關であるアシニヤ證券が發行せられて、賣却は一七九〇年の終りから實際に開始された。

かくして云はゆる教會の民主的組織が行はれることになり、特權的僧侶は寺院を追はれ、その私的財産を沒收された。そして僧侶は今や、すべて云はゆる俗間聖職者たるべく規定された。

だが、かかるフランス大革命の改革は、決して宗教團體そのものを否定するものではなかつた。否な、むしろ其の必要性を認めてさへ居た。かくして結局それは「憐れな失敗」



に終つたと云はれてゐるのである。

さて、宗教團體法は、最初、その特有の形式の下で、一七九五年二月二十一日まで、即ち四ヶ年間繼續した。そして少くとも三年間は實際に施行された（同書、二三五頁）。

しかし乍ら、次いで宗教團體法は、變形せられて、和親條約の中に空しく形骸を暴してゐた。ところで、和親條約と宗教團體法との間には、二つの大きな相違があつた。

先づ第一の相違は、和親條約によつて法王の干渉が復活した點である。

第二の相違點は、和親條約の制度に於ては、司教及び主任司祭の任命が行政權によつて行はれて、人民投票によつて行はれないことである。

故に宗教團體法から和親條約までには、革命的減少があつたわけである。即ち宗教團體法は、和親條約より一層非教會的、國民的、且つ民主主義的であつた。それは外國の權力、即ち根本では教權を全く認めない。國民が彼の絶對的主權及び人民投票によつて聖職者を任命し、且つ任補するのであつた。しかし和親條約中に宗教團體法から残つたものは、革命的及び非教會的起原の權限として、司教及び牧師の任命の正當性を教會から受けずして、

人民から受けることであつた。

従つて、ジョレスが云つたように、この宗教團體法なるものは、全く『私生兒結合』であつた（同書、二三六頁）。しかも此の法は、この根本及びその時代に於ては、革命的な果斷であつた。

だが、この時代に於ては、國家と教會との分離なる問題は、未だ課せられてゐなかつた。それは存在してゐなかつた。立法者の間に於ても、著述家の間に於ても、思想家及び哲學者の間に於ても、何人も憲法制定議會に、教會と國家とを分離させる考へを暗示した者がなかつた（同書、二三九頁）。

要するに、フランス大革命はブルジョア革命であつて、プロレタリアートの行き方とは、可なりに違つたものがあつた。（吾々は、さうしたフランス大革命的な宗教壓迫の事實を、明治維新の「廢佛毀釋」運動に見ることが出来る）。

然らば、プロレタリアートの反宗教運動は、此の運動を飛び越えて、如何に展開して來たのであるか？ 以下、吾々はそれを見て行くであらう。

第二章 十九世紀に於ける西歐の反宗教運動

—— 巴里コンミュンと反宗教運動 ——

一、序 説

十八世紀後半に行はれたフランス大革命を中心として、封建制度は廣汎に崩壊せしめられた。しかし、その運動に重要な役割を演じた第四階級、即ちプロレタリアートは、新しい支配階級たるブルジョアジーの發展と共に、政權に參與するどころでなく、益々悲惨な状態に押しやられた。

かくして必然的にプロレタリアートの独自の運動が起つて來た。そして其れは、主としてフランスを中心に行はれた。

吾々はその主なる事變として、三つの大きな歴史的事實を擧げることが出来る。即ち、一八三〇年の七月革命と、一八四八年の二月革命、それに一八七一年の巴里コンミュンの

革命の三つを擧げることが出来る。これらのプロレタリア革命は、要するに『フランス・プロレタリアートの三つの敗北』であつたが、しかし其等は決して無駄な反亂に終つたものでは決してなかつた。否な、それらの經驗を通してのみ、ソヴェート政權は可能であつたのである。特に巴里コンミュンは、人類史上最初のプロレタリア政權として、マルクス・レーニンの詳細な研究と分析とがなされてゐるものである。故に吾々は本章に於て、十九世紀に於ける西ヨーロッパの反宗教運動として、特に巴里コンミュンの反宗教運動に就て若干の研究を試みるであらう。

二、國家と教會の分離

一八七一年三月十八日、人類史上に初めてプロレタリアートの政權が出現した。即ちこれこそ、巴里コンミュンそのものであつた。

然らば、此の最初のプロレタリア政權は、宗教に對して如何なる政策を執つたか？

『舊政府の物質的壓迫の道具たる×××と×××とを一度び打破するや、コンミュンは直ち

に精神的壓迫の道具たる僧侶の權力の打破に向つた。コンミュンは教會が有産者團體である限り、全ての教會の解散と財産沒收を布告した。僧侶たちは、その先輩たる使徒たちに倣つて、信者の布施によつて生活するよう、私的生活の隱遁所へ送還された。』(註一)。

即ち巴里コンミュンは、四月二日、國教分離と、國家よりする凡ゆる宗教献金(豫算)の廢止とを布告した。そして僧侶の全財産が國有化された。

即ち、その布告は、次の如くであつた。

「巴里コンミュンは、

フランス革命の諸原理の第一が、自由であることに鑑み、

信教の自由は諸自由權中第一に位することに鑑み、

宗教豫算なるものは、その自由意志に反して市民に強制課税されるが故に、該原理に悖ることに鑑み、

事實に於て、僧侶なるものは、自由を蹂躪する××政治の罪惡の共犯者なりしことに鑑み、左の如く布告す——

第一條 教會を國家から分離す。

第二條 宗教豫算を廢止す。

第三條 宗教團體に所屬する謂はゆる不差押財産は、その動産たると不動産たるを問はず、これを國有財産に編入す。

第四條 右の財産の性質を檢め、これを國民の用に供するために、この財産に關して、即時調査を行ふべし。

巴里コンミュン(註二)

茲に注意すべきことは、右の布告が『信教の自由』を高調してゐることである。次いで四月十九日にコンミュンが『フランス人民に對する宣言』を發してゐるが、その中にも此の『信教の自由』を明記してゐる。(註三) 即ち吾々は、この點に於ても、巴里コンミュンが、ソヴェートの先驅であることを知る。即ちそれは單なる宗教壓迫の無意義なることを知らしめてゐるものである。

(註一) マルクス「巴里コンミュン論」フランス版四五頁。

(註二) デュノワ編「巴里コンミュン史料集」三〇—三一頁。

(註三) クラルテ社版「巴里コンミュン史料集」四六頁。

三、反宗教々育

また、右の國教分離が決定されたと同じ四月二日に、あらゆる宗教的表象、偶像、及び信仰を思ひ出させるやうな一切のものを、學校から取り去ることが決定された。學校では祈禱することが禁止された。學校なるものは、『個人の信仰に關する』ことに關與すべからずとされた。そして此の一般的布告は、漸次に實施された。(註一)

既に、巴里コンミュンの成立後直ちに、三月二十三日の夜、第一インターナショナルの巴里地區聯合評議員會は、その決定的な會議を持つて、コンミュンの向ふべき方向に就て重要な宣言を發したが、その中には明かに『非宗教的にして完全なる無料教育』の要求が掲げられた。(註二)

そして、それまで殆んどカトリック教會によつて獨占されてゐた國民教育をば、完全に非宗教化(ライシゼー)してしまつた。

即ち巴里コンミュンは、學校に於ける『キリスト教貧困兒童教育會』なるものの會員の

支配をば、完全に一掃してしまつた。そしてカトリック教會と、ナポレオン三世(一八七〇年九月二日、麾下の將卒によつて投獄さる)の時代に國家の特別保護を享けてゐた所の其の傳道組合の掌中から、新しい時代の人々の教育を奪ひ返した。

かうした教育方針を取るに當つて、コンミュンは労働者階級の要求に一致した一般的政治要素を取り入れることにしたのであつた。そしてそれは、ブルジョアジーのイデオロギ―や、迷信や偏見の傳統や、盲目的な信仰などを決定的に斷ち切つてしまつた。

五月十八日には巴里コンミュンは次の如き非宗教々育促進の布告をさへ出してゐる——

『教育委員會の提案により、

コンミュンは次の如く決定す——

コンミュンの命令にも拘らず、今尙ほ修道僧によつて經營されつつある凡ゆる教育施設の表を、二十四時間以内に作製すること。

非宗教々育に關するコンミュンの命令が、未だ執行せられざる區より、市會へ選出せらるるコンミュン議員の氏名を、毎日、公報へ掲載すること。

一八七一年五月十八日

巴里コンミュン(註三)

かくして教會の經營になる學校の廢止は、非宗教々育の導入に反對した所の司教や、修道僧や、その他の凡ての宗教的諸要素の解體につれて行はれた。明かに、彼等の教育事業は、チエールの反動政府の強化を意味してゐた。だが、彼等宗教的諸要素は、教育委員會の命令によつて、コンミュン治下の學校からは、斷然と遠ざけられたのであつた。

また、どの區役所も、教育上の新しい責任者たちに對して、宗教上の書物や、聖者たちの畫像や、十字架などを、學校から取り上げるように指令を發した。教員たちは、宗教上の合唱の代りに、學校の生徒たちによつて編制された××的合唱を組織した。

(註一) マルクス『巴里コンミュン論』へのエンゲルスの序文。

(註二) クラルテ社版『巴里コンミュン史料集』一九頁。

(註三) 同書、五〇頁。

四、農民と宗教

マルクスが云つたやうに、コンミュンが、農民に向つて『吾々の勝利は諸君の希望である』と呼びかけたのは、完全に正しかつた(『巴里コンミュン論』五五頁)。

「コンミュンは農民から血税を取除き、農民に安上りの政府を與へ、農民の吸血鬼たる公證人、辯護士、執達吏、及び其他の法曹的吸血鬼共を、農民自身によつて選出され、農民に對して責任を有する有給のコンミュンの官吏に轉化せしめた。コンミュンは、農民を、田畑の番人や憲兵や知事の専制から解放せんとした。コンミュンは、僧侶による愚鈍化に代へるに、學校教師による啓蒙を以つてせんとした。そして、フランスの農民は、就中、勳定高い人間である。農民たちは、僧侶への支拂ひは、收税吏から取立てられる代りに、教會員の信心深い衝動の自由意思による實行にのみ頼るべきだといふことを、極めて理性的に感づいた。かくの如きが、コンミュンの支配の——而してその支配のみの——フランス農民に豫期せしめた恩恵であつた」(同書、五六頁)。

五、僧侶の人質

巴里コンミュンは、ヴェルサイユに逃亡したブルジョア政府の『無茶苦茶な慘忍に對する最後の均衡たる人質』(マルクス)を取つたのであつた。即ち、コンミュンは人質の逮捕

を決議し、四月三日から十六日にかけて、パリの大司教ジョルジュ・ダルボワを初め、若干名の僧侶及び一般人を人質として逮捕した。

而してコンミュンは、當時チエールの手に捕へられてゐた唯一人のブランキーに對して、大司教とおまけに僧侶の全體とを交換しようと、幾度もくく申込んだのである。チエールはそれを頑強に拒絶した。チエールはブランキーを渡せば、コンミュンに首領を與へることになるが、一方大司教の如きは、死屍となつた方が、却つて最も良くチエールの目的に役立つことを知つてゐた。マルクスが云つた如く、だからして、大司教ダルボワの眞の虐殺者はチエールであつたのだ。

かくして人質の生命は、ヴルエサイユ側に於ける捕虜の繼續的射殺によつて幾度もくく失はれた。

今尙ほ巴里のオグゾ街には、かかる『人質屋敷』の遺跡があつて、毎年、プロレタリア側の巴里コンミュン祭に對抗して、カトリック的な反動的追弔會を舉行してゐる。

だが、コンミュンは矢鱈に人質を殺した譯ではなかつた。有名なコンミュンの委員ヴァ

ルランの如きは、オグゾ街の人質を救はうとしたものである。要するに、それはヴェルサイユ側の殺戮に比すれば殆んど問題にならぬものであつた。

第三章 ソヴェート同盟に於ける反宗教運動

一、序 説

一九一七年十一月七日の革命は、強大なプロレタリア政權としてのソヴェート政府の樹立によつて、廣大なロシアに、世界で最初のプロレタリア國家を建設したものである。

プロレタリアートの諸政策、諸施設は、今や廣汎にソヴェート同盟に於て實現されつつあるのである。

一九二八年に開始された五ヶ年計畫は、豊富な天然資源の開発によつて、物質的基礎の充實を來し、かくして文化建設の方面にも著大な進歩を示しつつある。

かうしたプロレタリアートの文化建設の過程に於て、反宗教運動は、いよ／＼その重要性を高めつつある。従つて、かかる運動が、如何に展開されつつあるかを究明することは讀者諸君にとつても極めて興味あることと思ふ。以下、主要な諸點に就て、若干記述の歩

を進めよう。

二、ソヴェート革命と宗教

—— 宗教に關する諸規定 ——

ソヴェート政權は、革命の翌年、即ち一九一八年の一月二十三日に、有名な『良心と宗教團體の自由』なる布告を發布した。それは宗教に對する最初のソヴェートの根本規定として、非常に重要な布告であるからして、以下にその全文を掲げることによつて、

良心と宗教團體の自由

一九一八年一月二十三日の布告

- 一、教會を國家から分離すること。
- 二、共和國内に於いて良心の自由を制限し、或は妨害するが如き、地方的法令の如何なる種類のものをも布告することを禁止し、その信する所の宗派の相違によつて、市民に優先權又は特權を與ふることを禁止すること。

三、各市民は如何なる宗教に歸依してもよいし、歸依しなくてもよい。そして其によつて、今まで法律の適用に際して爲されてゐた如何なる制限をも廢止する。

附り、市民の宗教的歸依又は無信仰に關する記入を、總ての公けの書類から排除すること。

四、總ての國家機能及び其他の公的並びに社會的の機能は、法律的には、如何なる宗教上の慣習或は儀式によつても伴はれてはならぬ。

五、宗教的慣習を自由に實行することは、ソヴェート共和國の市民の權利を侵害し、或は公衆の平和を亂さざる範圍内に於ては、安全に保護される。そして地方當局は、かかる場合に於て、公安を保全するため、すべての必要なる手段を講ずる權限を有してゐる。

六、何人も宗教的理由のために彼の私的義務を避けることが出来ない。他の者によつて私的奉仕の一つの形式に置換する條件のものを除いては、各々別々の場合に於て、裁判所の決定によつて許されなければならない。

七、宗教的誓ひは廢止される。若し必要な場合には、ただ嚴肅なる約束がなされる。

八、戸籍はただ當局、即ち結婚局及び出産局によつて記録される。

九、學校は教會と分離されねばならぬ。宗教的信仰の告白文の教育は、世俗的問題を教育する國立、公立又は私立の學校ではなされない。私人的職掌としては、人々に宗教は教へられてもよい。

十、總ての教會及び宗教的團體は、有志の團體及び組合に對して與へられてゐる一般的權限に従

ふ。そして國家から、又は地方自治體から、特權或は補助金を受け得ない。

十一、教會及び宗教團體の利益のために、強制的徴收金或は賦課をなすことは、その會員にその團體のために刑罰を科し、或は無理押しつけの方法を採ることと同様に、許可されない。

十二、教會及び宗教團體は、財産を私有する權利を持たない。また何ら法人の權限を持たない。

十三、現存する教會及び宗教團體の總ての財産は、民衆の財産であると宣言される。然し宗教儀式に特に必要な建物又は物品は、國家當局又は地方當局の特別な布告によつて、當該宗教團體に自由なる使用を許可すること。

X

また、一九二五年のロシアX黨第十五回大會では、次の如き宗教宣傳の新政策に關する決議文が通過した。

「教會堂、回教會堂、ユダヤ人教會、祈禱所を閉鎖するやうな行政的手段によつて、宗教的偏見と闘ふことは、止めねばならぬ。農村に於ける反宗教宣傳は、主として農民の熟知する事項の唯物論的説明でなければならぬ。霞、雨、暴風、旱魃の原因や、害虫の襲來や、土壤の性質や、肥料の役目などを説明することは、最良の反宗教宣傳である。かくの如き宣傳の中心は、學校であり、また黨組織の統制下にある輕便讀書室であるべきである。

「信者たちの宗教的感情を傷けはしないかと云ふことに特に注意を拂ふべきである。種々の宗教的感情に對する勝利は、多年の積みなき教育活動によつてのみ得られるものである。かやうな注意は、東部の共和國及び地方に於て特に必要である。」

「獨立教派に對しては、特に周到な注意を拂はねばならぬ。彼等の多數は、ツアールの専制下で、最も殘忍な虐待を受けてゐたので、大なる活動が認められる。如才なき接觸に依つて、ソヴェート活動の運河に彼等を導き込むことが、何よりも必要である。それは獨立教派の中には、一つの大きな經濟的文化的要素が存するからである。獨立教派の大衆を考へると、その事業は大なる意義を持つ。この問題は、地方的條件に關聯して解決されなければならぬ。」

x

また一九二五年五月十一日に發布されたソヴェート社會主義共和國聯邦の根本法たるソヴェート憲法には、その第十三條に、信教の自由、布教の自由を認め、特に反宗教宣傳の自由を附加してゐる。

即ち、その條文と云ふのは、次の如くである。

「第十三條 勞働者に良心の事實上の自由を保證せんが爲め、教會を國家より、而して學校を教會

より分離する。そして宗教的並びに反宗教宣傳は、之を凡ての人民に附與す。」

だが、此の條項は、一九二九年四月の憲法修正によつて、『宗教的宣傳』が除去され、反宗教宣傳は元のままに公認され、むしろ獎勵されるやうな結果となるに至つた。従つて此の改正によつて、反宗教運動は一層組織的なものとなつたのである。(註)

(註) 此の憲法修正と共に、布教の自由を制限した新法令が制定された。その要綱は次の如きものであつた。

一、布教を許すべきものとしての宗教の地位を憲法より抹殺し、反宗教宣傳を認む。

二、宗教團體が所屬信徒に物質的援助を與へることを禁じ、宗教、文學、裁縫、其他如何なる課目に關しても、講習會を開くことを得ず。

三、官許の特定教會堂以外、公私の敷地内に於ける宗教的儀式を禁ず。而して官許の教會堂は政府より賃貸されたものと見做す。

四、僧侶の衣服(法衣)は國家の財産とす。

五、僧侶はその住居地域以外若くは右地域内の唯一の教會以外に於て教務を遂行するを得ず。かくして新しい「ソヴェート同盟宗教團體法」が制定されたのである。そして宗教及び寺院の社會的進出に對して極度に制限を加へてゐるのである。

三、戦闘的無神論者同盟

ソヴェート同盟に於ける、反宗教運動の中心團體は、戦闘的無神論者同盟 (Unio de Militantaj Ateistoj—U^{MA} と略記す) である。

此の同盟は、一九二五年四月に創立されたものである。一九三一年の統計によれば、全ソヴェート同盟に六萬の細胞を持ち、會員數五百萬を有してゐる。

今、最近の報告書 (Unio de Militantaj Ateistoj en USSR kaj ĝia Laboro, Mosko, 1931.) によつて、その當初からの發展の數字を示せば、次の如くである (同書三〇頁)。

年次	細胞數	會員數
一九二六	一一、四二一	八七、〇三三
一九二七	三、二二一	一三八、四〇一
一九二九	八、九二八	四六五、四九八
一九三〇	約三五、〇〇〇	一一、〇〇〇、〇〇〇

一九三一(一月一日)	五〇、〇〇〇	三、五〇〇、〇〇〇
一九三一(五月一日)	約六〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇

そして此の同盟は、理論的機關誌として『ウオインストウユスチイ・アテイズム』(戦闘的無神論)を持ち、また青少年大衆のための『若き無神論者』を持ち、また理論的月刊雑誌として『反宗教者』(アンチレリデオズニク)を持ち、大衆雑誌として『無神論者』(ベズボーデユニク)を、また宣傳用新聞として同名の『無神論者』(ベズボーデユニク)を持つて居る。その他、地方的な機關新聞雑誌を合せて、目下二十三種の反宗教定期刊行物を出してゐる。尙ほ前記『戦闘的無神論』には、ドイツ文とエスペラント文の附録が出版されてゐる。これに見ても、ソヴェート同盟に於ける反宗教宣傳は、極めて大規模なものであると云はねばならぬ。

勿論、此の同盟はプロレタリア自由思想家インターナショナル(次章参照)に加盟し、そのロシア支部として最も有力なものである。

ソヴェート同盟に於ける反宗教運動は、此の同盟の指導下にあつて、最も組織的運動を

進めてゐて、その國際的影響は甚だ大なるものがある。ローマ法王を中心として叫ばれた『反ソヴェート十字軍』の如きは、正にそれに對する反對現象として、キリスト教的ブルジョア諸國に相當の反響を呼び起してゐる。

此の同盟は、目下、非常な勢力を以て發展しつつあるものの如くである。茲にその最近のスローガンを示せば次の如くである。

- 一、無神論者の全力を産業化の遂行へ！
- 二、無神論者は一人も突撃隊と社會主義競争の外側にあるな！
- 三、絶えざる農業經營の集團化のために、そして富農とその掩護物たる宗教に對して闘へ！
- 四、教育の普及のために、そして無智と宗教に對して闘へ！
- 五、「戰闘的無神論者同盟」の細胞なき集團農場を一つもあらしめるな！
- 六、愛國主義、國家的制限に對して闘へ！ 無神論の國際的教育のために闘へ！
- 七、クリスマスの代りに労働の組織デーを！
- 八、反宗教闘争に於ける日和見主義、妥協主義、及び極左歪曲化を排撃せよ！
- 九、クリスマスと泥酔と缺勤に對して闘へ！ 労働の突撃的テンポのために闘へ！
- 一〇、學校をXX主義的無神論教育の溶鑪たらしめよ！

- 一一、宗教的文盲に對して闘へ！ マルクス主義としてのレーニン主義のために闘へ！
- 一二、文化革命のために、そして古き奴隸的習慣に對して闘へ！
- 一三、社會主義建設への積極的参加によつて反宗教闘争を強化せよ！
- 一四、クリスマスに一人の缺勤者も出さな！
- 一五、ローマ法王の反ソヴェート戦争の宣傳に對しては、ソヴェート同盟の防禦力と赤衛軍の強化とを以つて答へよ！
- 一六、社會主義建設を妨害する宗教の足枷をぶちこわせ！
- 一七、反宗教闘争にヒオニールを動員せよ！

全露戰闘的無神論者同盟

吾々は、かうした實踐的な數々のスローガンの間から、色々な生きた事實と教訓とを學び取ることが出来るであらう。

四、コルホーズ(共同農場)と反宗教運動

ソヴェート同盟に於ける反宗教運動は、その對象として、特に農民層、婦人層、青少年層をねらつてゐる。

過去の惰性によつて神を求むる老人層に對しては、敢て教會への出入を阻止せざるも、比較的感化され易い婦人や青少年が教會に接近することは、非常に警戒されてゐる。

特に農民は、どの國でも、一番に宗教的な民衆である。だからこそ、ソヴェートの戰鬪的無神論者同盟は、特に農民に向つて強力な反宗教宣傳を行つてゐるのである。

ところで、ソヴェート同盟の農村に於ては、目下、全く新しい生活形態が展開されつつある。即ち、それはコルホーズ（共同農場）の運動である。それは、古い個人主義的な農村生活を打破して、新しい社會主義的な農村生活を建設するものである。

従つてソヴェート同盟に於ける反宗教運動は、社會主義社會建設の運動の一部門として、特に農村に於けるコルホーズ運動と密接な關連の下に行はれてゐるのである。吾々はその實狀の一斑を、ソヴェート映畫『春』や『大地』などで瞥見するを得た（後出「ソヴェート映畫と反宗教宣傳」参照）。

ソヴェート農村に於ける五ヶ年計畫の進展と、そのコルホーズ運動とは、先づ、文化水準の低い農民層に對する反宗教宣傳を絶對的に必要としてゐる。そこでは中世紀的な宗教

の影響下にある農民大衆をして、何よりも先づ、近代科學の洗禮を充分に受けさせねばならない。然らざる限り、農村に於ける社會主義建設は、全く薄弱なものとなるのである。

都市に於ける寺院清算運動（寺院のセツツルメント化）は、農村に於いても、その農村共同住宅の建設と共に、次第に實現されつつある。尙ほ特に「無神論者コルホーズ」なるものがあつて、此の運動の先驅をしてゐる。それは一九三一五月一日の報告によると、既に三百コルホーズ以上を算してゐる有様である（前掲報告書、三二頁）。

農村に特に多くの信者を持つ日本の佛教各宗各派の如きは、此の運動に就て、特に關心を持つものとなるであらう。

五、ピオニール（無産少年團）と反宗教運動

前にも一寸觸れたように、反宗教運動の大きな對象の一つは、青少年層であらねばならぬ。彼ら若人こそは、最も強く、宗教的感化を感じずるものであるからである。

それ故に、ソヴェート同盟に於ては、老人は多く咎めないが、若き世代に對しては徹底

的な反宗教イデオロギーを注入するのである。

元來、ソヴェート同盟の今日の國民教育は、非宗教々育である。宗教は完全に教育の領域から排除されてしまつてゐる。従つて、ソヴェートの兒童は、キリスト教的資本主義諸國に於けるが如くに、宗教教育を強制されてはゐない。

所で、ソヴェート同盟の指導的・前衛的少年組織たるピオニール（無産少年團）は、積極的に反宗教運動のカンパニヤに闘つてゐるものである。従つて、そのために最も組織的な反宗教々育が、彼らに對して施されるのである。最近、戰闘的無神論者同盟は、その宣傳者養成のための學校に、ピオニール部を特設するに至つた。

今、参考のために、そのソヴェート戰闘的無神論者同盟學校ピオニール部が篇成した反宗教々程を示すならば、それは次の如くである。

第一、社會主義建設と反宗教闘争

第二、少年反宗教運動、その目的と任務

第三、なぜ人は神を信するか（宗教とは何か、その起原、發生、階級性、宗教の反共產性、其他）

第四、科學と宗教（科學と宗教との對立、及び過去現在に於けるその闘争）

第五、宗教と新人養成問題（階級的闘士及びインタナショナル主義、婦人解放）

第六、宗教とソヴェート（最も廣く行はれてゐる宗教及び諸宗教の勢力、特質、反社會主義建設性）

第七、資本主義諸國に於ける諸宗教（キリスト教社會主義、カトリック政府、學校問題、革命運動の擡頭と十字軍）

第八、殖民地の宗教（ミッシヨン、カンヂ主義、宗教的對立の情熱）

さて、以上の習得法としては、無神論博物館の參觀、信者との問答、夜間討論、新聞などであつて、尙ほ實習を行はしめる。

生徒は三科に分れ、第一科は夜間討論會指導、第二科は壁新聞編輯、反宗教問答會指導、第三科は書籍新聞精讀である。生徒は以上の三科を終了した後、學校、コルホーズ、住宅組合等に進出するやうに組織されるのである。

かうした若き世代に對する反宗教的な働きかけは、けだし非常な功を奏してゐるもの如くである。

六、ソヴェート映畫と反宗教宣傳

—

ブルジョア諸國で製作せられるフィルムは、すべて皆、多かれ少かれ中世紀的な宗教的蒙昧さを取り入れてゐる。

慣習的な宗教儀式の傳統をアプリオリに肯定し、反映せしめてゐる。

否な、むしろ苦々しきまでの迷信を内包するてなければ、小市民的フィルムは製作され得ないが如くにさへ思はしむるものがあるではないか？

そこへ行くと、ソヴェート映畫はすつきりした爽快さを感じしむるものがある。如何にも親切に、宗教的愚昧・迷信の全カラクリを、具體的に、如實に暴露して行くのだ。そこにソヴェート映畫の手法があると云へやう。それは宣傳と云ふよりは、むしろ教育である。それは廣汎なる文盲退治に基く、必然的・隨伴的な大衆教化であらねばならぬ。

實際、ソヴェート同盟に於ては、フィルムは教育人民委員會(文部省)の管掌するところ

のものであつて、それはラヂオ、新聞、雜誌、書籍等々と共に國民教育の全體制の中に一つの重要な地位を占むるものである。

一九二八—二九年度から始められた、かの五ヶ年計畫に於ても、勿論フィルムの製作は、社會主義的文化建設に於ける重要な一つのテーマになつてゐる。今その最初の製作成績を示すならば次の如くである。

一九二八—二九年

一萬二千本

一九二九—三〇年

一萬三千本

このフィルム製作の増加は、次年度以後に於て益々發展せしめられたであらうことは、多言を要しないであらう。

かうした急テンポの文化建設の線に沿ふて、常に迷信退治、反宗教宣傳が、フィルムを通じて廣汎に行はれつゝあると云ふことは、けだし注目すべきことであらねばならぬ。

そこで私は、私の實際に見たソヴェート映畫の中から、特に反宗教宣傳が印象的になされてゐると思ふものを二つ三つ取り出して、少しばかり述べて見ようと思ふ。

先づその第一は、ブドウキンの作品「アジアの嵐」である。

このフィルムは一九三〇年に日本でも広く上映されたものであるが、私は一九二九年、まだヨーロッパに居た當時、巴里はシャンゼリゼーのテートル・デュ・コリゼーで、その封切りを見たものであつた。

その大體の筋は、かうだ――

「一九二〇年の始め、ヨーロッパ大戦の打撃を受けた資本主義の世界各國は、その經濟打開策に狂奔してゐた。この時、アジアの未開の地、蒙古がその廣大なる土地を擁して眠つてゐた。これが我利我利亡者の帝國主義者どもの眼に如何に映つたか？

彼等はあらゆる手段を以つてこの好餌を己の手中に收めやうと努める――彼等蒙古土民の魔匪劑である宗教（ラマ教？）を利用することによつて、勿論又彼等の最後の武器、軍隊を使ふことによつて――。だが、一方に於て、この時既に、この蒙古の地の一角に、鬪争の旗が押し進められた。さうして××的×衛軍と、帝國主義どもの軍隊とが激しく鬪

する。嵐、嵐！……」

この場合、帝國主義者どもが宗教をその支配の用具として利用しやうとするカラクリが非常に成功的に、そして極めてチビカルに現はされてゐる。それと共に、チムールのおやぢが死病で苦しんでゐる時、ラマ僧がやつて来て祈禱をする。その馬鹿馬鹿しさを巧妙に暴露せしめてゐる。（此の點は特に一九三一年三月新築地が築地小劇場で上演した脚本ではより高調されてゐた。そして強慾な僧侶は叩き出されてしまふのであつた）。

このフィルムは當時パリでは非常な人氣であつた。普通は一週間で終る上映も、このフィルムのみは、幾週間もこの同じコリゼーで續映されてゐた。（それに監督が主役が、巴里にやつて來ると云ふので、大變な人氣であつた）。

フランスで持てた理由の一つは、モデルになつてゐるイギリス帝國主義者の慘敗に對する皮肉な微笑によるものであらう。殖民戰に於ける敵對者イギリスの敗北は、フランスにとつて愉快なことであるに違ひない。従つて、それに引きかへ、イギリスでは、このフィルムは斷然、禁止されたと云ふことだつた。

日本でも、このフィルムは、國家主義者からも、また帝國主義者からも、異つた觀點からではあらうが、歓迎されたと云ふことであつた。

三

次は「新しきものと古きもの」即ち一名「全線」がそれである。これは名監督エイゼンシュテインの作品である。

これは、古い個別的な農村生活から、新しい共同的な農村生活、即ちコルホーズへの道を、全面的に示したものである。

即ちそれは輝しきソヴェート五ヶ年計劃の實況をバックとして製作されたものである。

このフィルムでは、早魃に苦しむ農民が、雨乞ひをするため僧侶の指導下に、盛大な宗教的儀式を行ふ。汗みどろになつて老若男女が、人間も動物もが、小丘の頂にまで長き行列をする。祭壇はしつらへられ、ローソクは、やけに燃えてゐる。聖僧の祈禱も終つて、やをら！ と云ふ段になる。然るに「忽ちにして天の一角に……」と云ふ奇瑞は、一寸も現れて來ない。

かくて無知なムジーク、農民たちも、かうして宗教の全く頼るべからざることを知る。

これに對立せしめられてゐるのが、巨大な現代科學の力だ。新式の牛乳精製機、それから新式のトラクター、新しい農村共同住宅!!

凡てのソヴェート農村は、古い殻を引き離して、新しい共同化への道を刻々に進めて行く!

トラクターの目ざましい縦隊!!

かうして、この映畫では宗教的愚昧に對して、かなりの痛撃が加へられてゐる。

四

その三は、一九三一年七月、東京で見たドヴシエンコの商品「大地」である。

これはソヴェート・ウクライナの農村を舞臺にしたものだ。こゝでも古きものと新しきものとの抗争がある。老いたるものはまだく、舊弊を墨守しやうとする。しかし鍛へ上げられたソヴェート青年は、片つぱしからそれを打ち砕いて行く。

父と子との相剋!!

このフィルムでは、大して反宗教宣傳は取り入れられてゐない。だが、宗教的愚昧は、初めに完全に擲擻されてゐる。

善良な一人の老農夫が靜かに死んで行く。天國へ行つたか、地獄へ行つたかの便りをするとの約束によつて、その友人の老農夫は、毎日墓場へ行つて死骸を埋めた土まんどろに耳をあてて、その便りを今か今かと待ちあぐんでゐる。

新時代の子供たちが、ピオニールたちが、このぢいさんを散々からかふのだ。

かうしたエピソードを持つてこのフィルムは、新式のトラクターの到着による古い農村の共同化への道を追つて行くのである。

五

かうした具合に、ソヴェート映畫は、多かれ少かれ、反宗教宣傳を取り入れてゐる。

ソヴェートの新しい生活は、この反宗教的出來事を抜きにしては、理解されないのである。ツァール時代の舊制度下に於てむしろ馬鹿々々しい程の宗教的愚昧が支配してゐたロシアに於ては、その文盲退治の仕事と共に、あらゆる迷信、あらゆる宗教的蒙愚を一掃し

なければならぬのである。

そのことは、新しき五ヶ年計劃による社會主義建設に伴ふて絶対に必要なこと、なつてゐるのである。

新しい醫療法の普及のためには、かの怪しげな、まじないや祈禱水の飲用を禁止しなければならぬ。それは民衆保健上、傳染病防止などの觀點からしても、絶対に必要なことである。

新しい農作法を發展せしむるためには、雨乞ひ祭の如きものへの信頼を失はしめねばならない。

だが、かうした馬鹿々々しいことが、實際、ツァール治下のロシアではない、現に我が日本でも行はれてゐるではないか？

所謂「宗教本質論」なるものによつて、かうした迷信、愚昧を抜きにした、そんなものに係りが無い、眞の宗教、誰れか云つた「第一義的宗教」なるものを呼揚せんとする人々もある。

だが一體、歴史的に、また社會的に、教團のない、従つて經濟的搾取を伴はない、宗教なるものが存在し得たかどうか？ また現存してゐるかどうか？

斷じて否！ である。

思辨的觀想も、個人の思惟たることを止め、社會的宣傳の手段を経て、集合思惟の形態に入る時、それは正しく一個のねむり薬でしかなくなる。

それは終局に於て、最も原始的な形態の宗教的愚昧、迷信と五十歩、百歩のものとなる。その機能に於ては、正しく同じであらねばならぬ。

ソヴェート映畫が、最も解り易い形態を把えて、宗教的愚昧、迷信をやつゝけてゐるのは、百パーセントの宣傳價値を持つものと云はねばならない。

x

尙ほ一九三二年春、日本でも封切された「人生案内」に於ては、昔しの大寺院が今は既に不良少年を收容する「労働コンミュン」に改造されてしまつてゐる。そこに吾々はソヴェートの寺院處分法の一例を發見することが出來よう。

第四章 反宗教運動の國際化——プロレタリア

自由思想家インタナショナル

一、その起原

反宗教運動は、今や世界的な波をのた打ち返してゐる。即ちそれはマルクス主義的世界觀の下に、強力な國際的運動として、プロレタリアートの世界的解放の一翼をなしてゐる。

而して、かかる國際運動の中心團體こそは、プロレタリア自由思想家インタナショナル (La Internacio de la Proletaj Liberpensuloj) なのである。

此のインタナショナルは、一九二五年に、チエツコ・スロヴァキアのチエブリツ市に於ける大會に於て創立されたものである。

この大會は、プロレタリアートの反宗教運動が、「偉大なる社會主義運動の一部分である」ことを規定した。そして此の新生のインタナショナルは、「如何なる宗教的イデオロギーと

も兩立し得ないところのマルクス主義の地盤の上に立脚する」ものであることを宣言した。茲に此の運動の重點があることは多言を要すまい。

二、その進展

此のインタナショナルの第二回大會は、一九二五年十二月、ライプチヒで開催された。そして第一回大會に於けると同じく、ブルツセル派のブルジョア的な無神論者インタナショナルの排撃を決議した。

第三回大會は、一九二八年一月、ケルンに於いて開催された。この大會では、オーストリア、ドイツ、デンマルク、ベルギー、フランス、ソヴェート同盟、チェッコ・スロヴァキヤ、ポーランド、アメリカ合衆國に於けるプロレタリア無神論者團體を結合して、大勢力となつた。これらの諸團體の中で、最も有力なものは、云ふまでもなくソヴェート同盟の戰闘的無神論者同盟であるが、その他の有力なものとしては、六十萬の會員を持ち、創立二十六年の歴史を有つドイツの團體、四萬人の會員を持つオーストリアの團體、二萬五

千人の會員を持つチェッコ・スロバキアの團體、等々であつた。

ところで茲に注意すべきことは、反宗教運動の戦線内に於ても、共產主義と社會主義との對立を生じたことである。ドイツ、オーストリア、チェッコ・スロヴァキヤ等の加盟團體内に於ては、主として社會民主主義者が指導權を握つてゐた。彼等は宗教に對して眞にプロレタリア的な闘争を行ふことなく、むしろ政府と教會との提携を承認し、ローマ法王の「反ソヴェート十字軍」に對しても、何ら積極的な大衆的抗議を組織し得なかつた。また進んで組織しようとしなかつた。従つて、さうした状態の下では、革命的反對派が結成されるのは當然のことであらねばならぬ。即ち革命的反對派は、教會及びファツシヨ攻勢に對する逆襲、ソヴェート同盟の擁護の闘争を要求した。ところが社會民主主義者たちは、反對派の此の運動に對して、除名を以つて答へた。例へば、ドイツでは、六萬五千人の會員を除名した。

然し、此の一九二八年一月のケルン會議では、左翼が多數を占め、文化反動、戦争の危険に對する闘争、労働者の宗教的去勢に對する闘争が、國際同盟の當面の任務として決定

された。プロレタリア自由思想家インタナショナル執行委員会内に於ける社会民主主義者及び議長ハルトウイヒは、ケルン會議の正しい決議をサボタージュしたのみでなく、これに對して闘争をすら開始した。例へば、ケルン會議の直後ウィーンで開かれたオーストリア無神論者大會に於て、彼はケルン會議の決議は「非マルクス主義的」であると云つて非難した。これと同じ策動が、ドイツ、チェッコ・スロバキヤの會合に於ても行はれた。彼は反宗教運動は、超黨派的であると主張しながら、内密に社会民主黨の政策を持ち込んだのであつた。

一九三〇年四月には、ハルトウイヒは、更にチェッコ・スロヴァキヤの革命的無神論者團體たる『スヴァズ』を、インタナショナルから除名し、次いで數ヶ月後には、スミス及びフランスの加盟團體をも、除名してしまつた。かくして社会民主主義者たちは、インタナショナルを分裂させ、眞に革命的なプロレタリア分子を壓迫しつつ、ブルツセル派のブルジョア自由思想家インタナショナルと野合するための商議をすすめた。(註)

(註) 當時の狀勢に就ては、ルナチャルスキーの論文「プロレタリア自由思想家インタナシヨナ

ルの狀勢」[「インプレコル」フランス版、一九三〇年八月九日號]を見よ。(本書の卷末に譯載す)。

x

かかる狀勢下に、プロレタリア自由思想家インタナショナルは、その第四回大會を、一九三〇年十一月十五、十六の兩日、チェッコ・スロヴァキヤのボーデンバツハに開催した。

此の大會には、オーストリア、ドイツ、ソヴェート同盟、ポーランド、ベルギー及びチェッコ・スロヴァキヤの代議員が出席し、その外、ハルトウイヒによつて除名されたチェッコ・スロヴァキヤの革命的左翼、スミス、フランスの代表、十萬の會員を持つドイツの左翼反對派、オーストリアの反對派の代表も參加した。ベルギー、ポーランド、ソヴェート同盟などの加盟團體の代表は、革命的左翼の名に於て、除名された團體及びドイツの團體の代表が決議權を持つて大會に出席することを要求した。しかし全て此等の要求は、社会民主主義者によつて、ファシスト的手段をもつて拒否された。そこで、ソヴェート同盟、チェッコ・スロヴァキヤ、スミス、ポーランドの加盟團體、ドイツの反對派、フランスの革命的無神論者同盟、ベルギーの無神論者同盟によつて、裏切者ハルトウイヒ、ジージュエ

ルス、ロンツアル、レーベンハルト等を除名して、大會を續行した。

かくして、國際的反宗教運動は、今や明かに二つの對立する潮流を進んでゐるのである。

三、その現勢と各國支部

プロレタリア自由思想家インタナショナル (I.P.F.) の本部は、目下ベルリン (Berlin, C 25, Münzstr. 24) にあつて、機關紙『プロレタリア自由思想家の聲』(Proletarische Freidenkerstimme) を出してゐる。そして國際的結合に努力してゐる。

ドイツの同盟は、『自由思想家』(Freidenker) なる機關紙を持つてゐる。

フランス支部たる『革命的自由思想家聯盟』(Union Fédérale des Libres Penseurs Révolutionnaires de France) では、『プロレタリア・反宗教・闘争』(La Lutte anti-religieuse et prolétarienne) が、毎月機關紙として發行されてゐる。

ベルギーでは、ベルギー唯物論者同盟(プロレタリア自由思想)の月刊機關紙として、一九三一年四月二十日、『プロレタリア思想』(La Pensée prolétarienne) が創刊された。

その他、ソヴェート同盟は、前述した通り、極めて活潑な運動をなして居り、多くの機關紙、宣傳紙を持つてゐる。また、スイス、オーストリア、オランダ、チエツコ・スロヴァキヤ、ポーランド、ギリシヤ、メキシコ、蒙古などの各支部も、其々、同じ潮流の反宗教運動を押し進めてゐる。

尙ほ、各殖民地に於ける反宗教運動が、特殊な關心を持つて遂行されんとしてゐることも、注意すべきことであらう。

最後に、日本に於ける反宗教運動に就ては、章を改めて述べたいと思ふ。

第五章 日本に於ける反宗教運動

一、序 説

吾々は既に長々しく、無神論の史的発展、並びにその実践的な現れとしての反宗教運動の潮流を、全世界的視野に立つて眺め來り、最後に今や愈々、日本に於ける反宗教運動を瞥見すべき場所に達したのである。

日本に於ける反宗教運動は、全く國際的運動の一環として現れてゐるものであることは云ふまでもないことであるが、そこには尙ほ若干の日本の特殊性があることも忘れてはならない。

日本の宗教が、ヨーロッパやアメリカのように、單にキリスト教でない點は勿論、それ以外に、否な其れに遙かに優つて多くの佛教的諸要素が存在してゐる點や、尙ほ日本固有の民族的宗教としての神道が存續してゐることなどは、日本の反宗教カンパニヤに於いて

可なりに注意さるべき特殊状態であらねばならぬ。

明治維新の際、ブルジョア的な反宗教運動として謂はゆる『廢佛毀釋』なるものがあつた。しかし結局、それは不徹底なものに終つてしまつた。そして今日になつても尙ほ『境内地還附』の問題がむし返へされてゐる。そして佛教々團の反動化が、正にそれに正比例せんとしてゐるのである。

日本に於けるプロレタリア的反宗教運動は、全く世界大戰以後のことに屬する(註)。かの水平社運動の特に初期に於ける本願寺に對する募財拒絶運動や、第一回普選に於て寺院閉鎖を末寺に達示した東本願寺に對する勞農黨の抗議や、さては農民組合や勞働組合の募財拒絶運動、等々の斷片的な運動が、行はれてゐた。然し全般的な反宗教運動は、極めて最近の日附に屬する。それは實に一九三一年の前半からである。

(註) それ以前としては、明治四十年二月十七日、日本社會黨第二回大會に於ける決議案に、黨員の隨意運動の一つとして「非宗教運動」を通過せしめてゐる位ひのものであらう。

無神論の議論も、既に早く一、二の論客によつてはなされてゐたが、マルクス主義宗教

論が、本舞臺に乗り出して來たのは、一九二九年から、一九三〇年にかけてであつたらう。而して、かかる理論闘争は、やがて物體化の過程を辿り、一九三一年に至り、いよいよ「反宗教闘争同盟準備會」なるものが成立した。

二、反宗教闘争同盟準備會

一九三一年三月に至り、反宗教闘争同盟準備會は、その産聲を擧げた。雑誌「プロレタリア科學」の如きは、特に「反宗教運動の頁」を設けて、此の新生の準備會を助けた。

次いで、準備會は、五月二十三日、第一回の宣傳演說會を、上野の自治會館で開催し、時節柄、非常な反響をまき起した。反宗教闘争は、一時、ジャーナリズムの寵兒とさへなつた觀があつた。

然らば、此の反宗教闘争は、如何なる内容を持つものであるのか？ 吾々は當時發表された同盟準備會の暫定「行動綱領」(草案)によつて、その理解に資せよう。即ち、それは次の如き四十七の項目から成るものであつた。

- 一、あらゆる教科書より一切の宗教的宣傳記事の削除
- 二、學校におけるファシズム教育の排撃
- 三、兒童の宗教的情操教育の排撃
- 四、××寺院への學生生徒の參拜強要反對
- 五、宗教學生の反宗教運動參加の自由
- 六、各種學校に於ける宗教科又は學生宗教團體の廢止
- 七、一切の宗教學校の廢止
- 八、工場布教絶對反對
- 九、工場内の佛壇、神社、禮拜所の即時撤廢
- 十、工場内の一切の宗教的修養團の排撃
- 十一、工場内に於ける宗教的修養雜誌の配布及び購買勸誘強要絶對反對
- 十二、宗教的祭禮に名をかる工場労働者の慰安會、旅行、遠足、等々反對
- 十三、軍隊、刑務所、在郷軍人會、青年團、處女會、青年訓練所、等々に於ける布教絶對反對
- 十四、社會事業(救民、救養、授産、職業紹介、宿泊所、簡易食堂、人事相談所、感化院等)に名をかる一切の宗教的宣傳の排撃
- 十五、教團所屬財團設立維持反對

- 十六、あらゆる色彩の宗教的反動的教化團體の排撃
- 十七、一切の宗教的教化運動の排撃
- 十八、加持、祈禱、及び一切の宗教的醫療反對、無産者診療所の支持擴大強化
- 十九、あらゆる神符、護符の拒否
- 二十、一切の聖像、偶像の禮拜反對
- 二十一、一切の迷信及び宗教的慣習の徹底的打破、科學思想の普及
- 二十二、宗教的募財、寄附の徹底的拒絶
- 二十三、教團による營利事業反對
- 二十四、宗教的婚禮、儀式、葬儀、及び一切の宗教的年中行事排撃
- 二十五、反宗教的勞働者農民葬の舉行普及
- 二十六、宗教的祝祭日・記念日に代はる勞働者農民の祝祭日・記念日（メーデー、三・一五記念日、
四・一六記念日、八・一デー、十月革命記念日、等々）の普及擴大
- 二十七、宗教的青年會、婦人會、處女會、宗教的日曜學校の撲滅
- 二十八、宗教的文藝、映畫、演劇、音樂、ラヂオの排撃
- 二十九、スポーツによる宗教宣傳絶對反對
- 三十、プロレタリア藝術、プロレタリア娛樂、及び赤色スポーツの宣傳普及

- 三十一、國家による宗教統制擁護の撤廢
- 三十二、社寺に對する國家及び地方自治團體の經濟的補助の廢止
- 三十三、新興宗教を名乗る一切の偽瞞的宗教運動に對する徹底的抗爭
- 三十四、世界宗教平和會議絶對反對
- 三十五、社寺、境内、及び附帯地の勞働者農民への無償解放
- 三十六、社寺、教會、説教所を勞働者農民の集會に利用する自由の獲得
- 三十七、社寺所有地の小作料全免のための闘争
- 三十八、反宗教運動に關する一切の言論出版集會の自由の獲得
- 三十九、反宗教運動者の監禁、逮捕絶對反對
- 四十、帝國主義のお先棒たる殖民地に海外布教絶對反對
- 四十一、あらゆる形態の宗教撲滅
- 四十二、社會民主主義的似而非反宗教運動との徹底的抗爭
- 四十三、一切の文化反動並びにファシズム、社會ファシズムに對する闘争
- 四十四、マルクフーレーニシ主義世界觀の普及擴大
- 四十五、反ソヴェート十字軍打倒
- 四十六、帝國主義××絶對反對

×

六月に至つて、準備會は月刊の機關雜誌たる『反宗教闘争』を創刊した。(本誌は毎號發禁に遭ひ、八月號の第三號を以つて解消した)。

準備會は八月に、夏期巡回宣傳講演會を組織し、山梨、長野、新潟、富山、岐阜、愛知、京都、大阪、奈良、兵庫、三重の各府縣に轉戦した。

かくして、いよいよ九月二十日、反宗教闘争同盟全國結成大會が築地小劇場で持たれることになった。だが、その結成大會は、秋田氏が開會の辭を述べようとするや否や、直ちに中止解散を命ぜられてしまつた。

次いで翌二十一日、上野の自治會館に開かれた演說會も、「演說會を大會に変更すると云ふ」動議がなされるや否や、直ちに中止解散を命ぜられた。だが、その刹那「オレ達は茲に日本××的××論者同盟を結成する」との絶叫が、満場の聽衆によつて拍手を以つて應ぜられた。かくして、これこそプロレタリア自由思想家インタナショナルの日本支部たる

べきものであらう。

三、日本反宗教同盟

これは高津正道君を中心とする云はば社會民主主義的反宗教運動であつて、かのプロレタリア自由思想家インタナショナルに於ける社會民主主義者ハルトウイヒやジーヴェルスの運動と同じ性質のものであつて、これに對しては、宗教家の方面からも可なり甘く見くびつた批評をしてゐる人がある。

この同盟の準備會は、一九三一年四月に組織され、十月一日に機關紙『反宗教』を創刊し、十月一日、上野の自治會館で『淋しい』結成大會を持ち、無事に同盟を成立せしめた。

此の同盟のスローガンとして掲げられてゐるものは、次の如きものである。

- 一、あらゆる形態の宗教打倒
- 二、科學的社會觀の強調普及
- 三、宗教的社會主義運動の排撃
- 四、宗教的醫療及び募財絶對反對

五、工場及び其他の團體布教絶對反對

六、宗教的修養團の撲滅

七、政治と宗教との結托絶對反對

だが、これらのお題目が、社會民主主義的方法によつて、どれだけ實現されるかは、甚だ疑はしいものとされてゐる。

四、結言——今後の展望

吾々は茲に此の貧しい調査研究を終るに當り、數言、結びの言葉として、今後の展望を試みたいと思ふ。

嘗つてエンゲルスが明かに指摘した如く、如何なる宗教と雖も、『宗教は一旦形成されると、常に傳統的な實材を包含して居り、そして云ふまでもなく傳統なるものは、イデオロギ一の一切の領域に於て、一個の大きな保守的力となる』(フォイエルバツハ論)。

かうした保守的力としての宗教は、従つて新興プロレタリアートに對して、常に敵對的な存在となる。このことは、特に現時の日本に於ける文化反動に就ても、極めて明かに現

れてゐるものである。かくして、プロレタリアートの反宗教運動は、その最後の日まで闘ひ抜かれる運命下にあるものである。尙ほ宗教的愚昧性は、現代科學の飛躍的發展によつて、次第々々に、必然的に解消せしめられるであらう。

かくして、日本に於ても、將來、ソヴェートの宗教清算の時期が到達するのではないかと思はれる。今日の宗教團體なるものは、それ自身、一個の反社會的存在たらんとしてゐる以上、かの寺院清算の運動も、やがて事實となつて現れる時期があり得るだらう。そして戰鬪的プロレタリアートは、そのために闘ひ續けて行くであらう。即ち、かかる闘争の持續こそは、正しく新しき世界史の創造である。

x

だが尙ほ、冷靜に再考せねばならぬ一つの問題がある。即ち、全體としての宗教現象が、果して人間の世界から全部的に姿を消すであらうかどうかの問題である。

既に吾々の見た如く、マルクス主義によれば、將來の宗教は、自然消滅すべき運命下にあるものである。即ち宗教は現實的苦難の反映なるが故に、社會變革によつて新社會が創

造らるれば、現實的苦難は消滅し、従つてその反映たる宗教も亦必然的に消失すると云はれてゐる。だが、人間生活に於ける現實的苦難は、かかる新社會に於ても亦、何らかの形態に於て、存在するであらうことは、想像するに難くなからう。かかる場合、吾々は再び幾多の人生問題に悩むであらう。かくして吾々は廣い意味に於ける現實的苦難を悩むことから全く自由になることは有り得ないであらう。

附録 プロレタリア自由思想家

インタナショナルの狀勢

ア・ルナチヤルスキー

以下の一文は「インプロレル」(フランス版)一九三〇年八月九日號(第十年、六十七號、八五二—八五三頁)に投載されたものである。少し古いと云へば云へるが、日本の現段階に對しても可なり重要な内容と暗示とを持つ一文獻であることを疑はぬ。

x

プロレタリア自由思想家運動は、資本主義に對するプロレタリア階級の闘争の多くの防禦地域の一つである。階級運動の全體の中に起つた所のものは、其の防禦區域の各々に影響するものである。従つて、イデオロギ一の領域に於ても、階級闘争は非常に重大なるが故に、この自由思想家の運動は大いに重大である。若し、一般階級闘争や、政治的權力に

對する鬭争或は經濟鬭争の諸問題に於て、吾々が社會民主主義的首領どもの労働階級に對する公然の裏切りを認めるならば、プロレタリア自由思想家の運動たる鬭争のイデオロギ一的領域に於て、それと同じ裏切りが、即ち社會ファシスト的政策が、現れてゐると云ふことは、少しも驚くべきことではない。

プロレタリア自由思想家インタナショナルの社會民主主義的首領たちにとつては、一九二五年に採用された行動綱領、即ち無神論のための××的プロレタリアートの鬭争の綱領及び『方針』は、『餘りに××的』で許容し得べからざるものである。かくしてプロレタリア自由思想家インタナショナルの××的分子が此の『方針』の適用のために鬭争する間に、社會民主主義的首領達は、あらゆる方法を以て其れに抵抗した。プロレタリア自由思想家インタナショナルの綱領を棄てるのは、左翼分子ではなくして、プロレタリア自由思想家たちの強力な運動を日和見主義と不活潑性との泥沼の中に埋没せしめんと熱中してゐる所の改良主義者たちである。左翼の代表者たちは、かかる傾向に對して戦ひ、且つ改良主義的首領たちの戦術と政策とを暴露する。そこから彼等の憎惡が、また其處からプロレタリ

ア自由思想家インタナショナルの諸隊伍に於ける全批判を窒息せしめんとする努力が、また其處から鬭争團體たるプロレタリア自由思想家インタナショナルを葬儀組合や田舎の御祭りの組合の類に變化せしめやうと望んでゐる所の社會民主主義的首領どもの政策に對して鬭争する所の凡ての人々を除外せんとする彼等の政策が由來するのだ。ドイツに於ては全地方團體中から、六萬五千人の同志が除名されたのだ。

しかし、社會民主主義者の指導は、各國支部を分裂せしむるだけでは満足しないで、その分裂政策を國際的段階にまで應用する。かくしてプロレタリア自由思想家インタナショナルの執行委員長たるハルトウイヒ教授は、チエツコ・スロバキヤのプロレタリア自由思想家聯盟たる『スヴァズ』(Svaz)が、その負擔金を支拂はなかつたとの理由で、二萬五千人を除名した。プロレタリア自由思想家の幾千萬の大衆は、この教授にとつては、如何に下らないものであらうか？ プロレタリア自由思想家の運動の一致は、彼に對してどんな關係があるのか？

『スヴァズ』の除名、及びその代表者たる同志ベランのプロレタリア自由思想家インタナショナル執行委員会からの迫奪は、同様に委員会及び最近の大会に於て多数を確保せんと欲する右翼によつてなされた横暴・残忍な奸計である。ハルトウイヒ及びジーヴェルスは、彼等の除名政策を繼續せんとの意志を有し、そして其の事を決して陰蔽しない。かくしてジーヴェルスは、一九三〇年六月十六日及び十七日の兩日、ウイーンに於て開催された委員会の會議に於て、大會に於ては改良主義者が大多数を得て、少數派は屈服するか又は辭任する外は無からうと宣言した。そしてジーヴェルスの忠實な影武者であり、雑誌『無神論者』に於ける彼のペンであり代辯者である所のハルトウイヒは、彼等(改良主義者たち)は共産主義者と共には何事をも爲さないし、また彼等は何等共通の言葉を持たない、等々と書いてゐる。

ハルトウイヒ及びジーヴェルス一派は、マルクス主義の諸原理及びプロレタリア自由思想家インタナショナルの決議や『方針』を勇敢に守る所の××的左翼分子に對して、激烈な戦ひを指し向ける。ハルトウイヒ及びジーヴェルス一派は、自由思想家達は少しも黨

の目的を追求しないと云ふこと、即ち自由思想家たちの運動に於ては、彼等は社會主義的政策を實行しないで、彼等の政策のみしか實行しないと云ふこと、を宣言することによつて、勤勞大衆を混亂せしめんと試みる。其處に最悪のデマゴグとハツキリした神秘化とがあるのだ。このことを疑ふ人は、一九三〇年五月の『自由思想家』紙上に於て、ドイツ自由思想家聯盟の大會でなされた挨拶演説中、ドイツ社會民主黨ベルリン地區代表者クンストラーによつて發表された宣言を読まれんことを希望する。即ち同紙に曰く——

『同志クンストラーは、彼の挨拶演説中で、ドイツ社會民主黨ベルリン地方支部と自由思想家聯盟との間に現存せる誠實な友誼的諸關係に就て力説してゐる。自由思想家の勝利はまた黨の勝利でもある。吾等は常にかくあらんことを望む。』

明かに、ドイツ社會民主黨は、反宗教戦線に於て、大勝利を博することを決して希望して居なかつた。尙ほカトリック中央黨——ローマ法王との和親條約コンコルダトのために投票し、且つ其の理論はマルクス主義とカトリック教とを結合せんとする(例へばドートマン、ゲオルグ・バイヤー)所の——と協力してゐる社會民主黨が、どうして其のことをなし得やうか？

しかしながら、左翼に對して鬭争するところの社會民主主義的首領どもは、好んでブルジョア自由思想家どもと意氣投合するのだ。嘗つては、この同じ社會民主黨の首領共が、ブルジョア自由思想家たちの組織せるブルツセルの第二インタナショナルからの脱退、及びプロレタリア自由思想家の自治的組織の創始を、プロレタリア・イデオロギーの最も偉大な勝利として特質づけた時代があつたのだ。しかし爾來、時勢は變つた。ジーヴェルス及びハルトウイヒ派は、右翼への突然的な方向轉換をなした。ハルトウイヒは、××的言辭の陰にかくれて、おまけに歪曲して解釋されたレーニンの語句まで引用しながら、ブルジョア・インタナショナルと合流することが有利であり、且つ必要であると書いた。ジーヴェルスは今年（一九三〇年）の四月に於けるドイツ自由思想家聯盟の大會に於て、次の如く述べた。

『ブルツセル・インタナショナルとの軋轢は、清算されねばならない。吾々はプロレタリア自由思想家インタナショナルと完全な協調を保ちつゝ、自由思想家の二つの國際團體の融合に關して、フランス及びベルギーの同志たちと確實に二週間以内に商議する所が

あるであらう。』

而してジーヴェルスは、ブルジョア自由思想家インタナショナルと商議するために、ブルツセルに赴いた。この商議の後、ブルツセル・インタナショナルの首領は、ジーヴェルスと彼との間の交渉は兩者の完全な一致を示し、従つて最早や總ゆる組織の融合に反對する何等の障礙もないと云ふことを確證する一宣告を公表した。

ブルツセル・インタナショナルへ加入せる最も大きい團體はフランスとベルギーとにあると云ふ事實にも拘らず、ジーヴェルスは此の商議の途上で之れら兩國の如何なるプロレタリア團體にも觸れなかつた。フランスのプロレタリア自由思想家團體は、經驗の不足からして、彼等の階級に關係のないブルジョア團體の中で困惑せる労働者たちの間で働いてゐる。そして其等の労働者をプロレタリアートの陣營に獲得せんと努力してゐる。それはその性質そのものによつて、ブルジョア・インタナショナルがプロレタリア自由思想家運動にとつて敵であると云ふことを労働者に向つて證明する。ブルジョア自由思想家たちはマルクス主義に對して戦ひ、階級鬭争が歴史的發展の積極的な力であることを否定し、自

由主義的辯明をなして、プロレタリア階級の意識を曖昧ならしめることにしか役立たない。茲に於てか、ジューエルスは、ブルジョア自由思想家とプロレタリア自由思想家との間に何等原理的な矛盾がないと宣言する。すべて此等のことは、執行委員會が其れを議題に上すことなく、且つ彼に交渉を委任したことから結果したのである。ただ、ジューエルスはハルトウイヒの同意を得ただけであつた。

執行委員會のウイーンに於ける最後の會議に於けるその「報告」の中で、ハルトウイヒは、ジューエルスのこの奸計に就て一言も注意して居ない。そして若し、左翼の首領が此の「健忘症」の會長に、人々がプロレタリア自由思想家インタナショナルと結婚させやうと思つてゐるブルツセルの花嫁の存在を思ひ出させなかつたならば、總てのことは忘れられて仕舞つたであらう。

プロレタリア自由思想家インタナショナルの理論的活動はその團體的活動に絶對的に依存する。貧弱なる成長、これが此の領域に於けるプロレタリア自由思想家インタナショナルの活動を特色づけるものである。而して若し人あつて、若干の活動をなさんと決心する

ならば、その活動は反動の刻印を捺されるのである。プロレタリア自由思想家インタナショナルの執行委員會は、悪臭を發散しつつある法王及び其他の諸宗教の反ソヴェート・カンパニヤに對して大衆の廣汎なるカンパニヤを組織するの必要を未だ信じなかつた。カトリック教會こそは、資本家的利潤のためにする宗教の搾取の典型的の實例なのだ。この實例の助けによつて、勤勞者大衆に對して宗教は資本主義の發生及びその死滅に密接に關係してゐると云ふことを容易に示し得るのだ。そして若しジューエルスが反ソヴェート・カンパニヤに於て戦つたとしても、それは法王の榮譽に對して抗議したのではなかつた。彼の機關誌に、彼はイルマ・ペトロヴァとか云ふ者の一文を發表してゐる。この論文は、法王の鬭争と何等異るところがないのだ。反對に、彼は、多くの誹謗を創造するため、變態的幻想に充ち満ちてゐて、未だ大變に怒りつばいのだ（「フライテンカー」第四號を見よ）。

執行委員長ハルトウイヒは、このジューエルスの十字軍に對して、何事も計畫しなかつた。最近の會議に於て、彼は、ソヴェート同盟の無神論者聯盟が同じくドイツ自由思想家聯盟の活動を批判した文を書いた爲に、ジューエルスはローマ法王上諭第二號を發行する

の権利があると云ふことを確認して、同じくジーヴェルスを保護した。

x

執行委員會の六月十六日及び十七日の會議に於て、左翼（ソヴェート同盟、ポーランド、フランスの各團體の代表者たち）は、ハルトウイヒの策略に引つかかつて、少數となつた。ハルトウイヒとジーヴェルスとは、トロツキー一派の手中に在るベルギーの「唯物論者聯盟」の代表者バラバノヴァ夫人自身に援助を求めた。バラバノヴァ夫人は、ベルギーに於ける此の運動の永久的・積極的協力者ではない。そして「唯物論者聯盟」は、彼女に委任する権利を持つてはゐない。これこそ、ハルトウイヒの云はゆる「偶然的」大多數なのだ。すべての原理上の問題に於ては、バラバノヴァ夫人は、改良主義者たちと投票を共にした。左翼の猛烈な抗議を無視してハルトウイヒ及びジーヴェルスの多數黨は、チエツコ・スロバキアの團體「スヴァズ」をプロレタリア自由思想家インタナショナルから、又其の代表者、同志ベランを執行委員會から除名することを承認した。同様に、ドイツの聯盟の反對派の代表者、同志マインスは、三票對四票の差で、この會議に出席することを許

されなかつた。か様にして、プロレタリア自由思想家インタナショナルの社會民主主義的指導はジーヴェルスの指導に反對してゐる所の十萬のプロレタリア自由思想家を沈黙せしめんと欲したのだ。反對派の代表者たちが、第四回大會に出席することを許容せんとする提案も、握り潰されてしまつた。ハルトウイヒは、そのことに就て、非常に「憤慨」し、ために會議を速かに終結せしめんと努力した程であつた。重要なことは、プロレタリア自由思想家の全運動の注意を、次の點に引き附けることである。即ち、十萬のプロレタリア自由思想家たちは、今や全體的運動の外にあり、他の十萬の人々は、プロレタリア自由思想家インタナショナルに於て彼等の勢力を回復するために、頑強に闘争してゐると云ふことである。然し乍ら、ハルトウイヒや其の仲間たちはそのことに就ては何事も知ること欲せず、十萬のプロレタリア自由思想家の代表者が發言權を持つて大會に参加することを許可するの提案が爲されたと云ふ單なる理由で、會議を終結せしめんと欲するのだ。

x

執行委員會の會議の結果は、どうであらうか？ 執行委員會は、僧侶と教會との活動に

直接關係ある大事件が起るまで十ヶ月間も開催されなかつた。この状勢の中にあつて、ハルトウイヒは何を云はんと欲したか？ 如何に××主義者たちはプロレタリア自由思想家インタナショナルの活動を批判するか、従つて如何に彼等をして沈黙せしめること、及びプロレタリア自由思想家インタナショナルから彼等を追放することが必要であるか、これこそ、ハルトウイヒが第四回國際大會のための準備的手段として、彼の『歴史的』報告の終末に於てなした所の提案である。そこにこそ一つの體系、即ち放逸な社會ファシストの體系があるのだ。

ハルトウイヒの後で、ソヴェート聯盟の自由思想家の代表者が演説し、次に新たにハルトウイヒ、ジューエルス、バラバノバ、ランツァール（オーストリア代表）等が演説した。そして時間がないと云ふ似而非理由の下に、フランス及びポーランドの××的聯盟の代表者たちは演説する許可が與へられなかつた。

議事日程の第二の點は、第四回大會の問題であつた。ハルトウイヒは、ポーデンバツハ（チエツコ・スロバキア）に大會を召集せんことを提案した。ポーデンバツハを開催地とし

て選んだのは、偶然ではない。チエツコ・スロバキアの××的聯盟をプロレタリア自由思想家インタナショナルから除名して以來、ハルトウイヒはあらゆる犠牲を拂つて、チエツクの改良主義的聯盟の權威を發揚せんと苦心してゐる。そしてポーデンバツハこそは、實にその聯盟の根據地なのである。

ソヴェート同盟の戰鬪的無神論者聯盟の代表者は、次の大會の議事日程に、次の如き諸問題を提出せんことを提議した。即ち——

任務。

- 一、文化的反動及びファシズムの攻勢と、プロレタリア自由思想家インタナショナルの
 - 二、殖民地諸國に於ける教會の活動と、プロレタリア自由思想家インタナショナル。
 - 三、プロレタリア自由思想家運動の××的團結のための闘争。
 - 四、ソヴェート同盟に於ける文化建設と、戰鬪的無神論者聯盟の役割。
- ジューエルスの提案によつて、以上の諸問題は、ただノートがとられたに過ぎなかつた。他の一提案——大會前に『無神論者』誌上並に各國支部の機關紙に於て討論を開始すると

云ふ提案——は全く抑壓されてしまった。

××派の代表者たちは、プロレタリア自由思想家インタナショナルの社會ファシスト的指導者の分裂政策を厳正に批判した一宣言を作るべき義務のあることを自覺した。次の大會に於ては××的左翼は、社會ファシストの分裂政策に對して、強力な闘争を敢行するであらう。だが、既に今日、大會以前に、プロレタリア自由思想家運動の××的統一のための頑強な闘争をなすことが問題となつてゐる。

無神論と反宗教運動



昭和七年七月十五日印刷
昭和七年七月三十日發行

定價金五十錢

送料 金十錢

著者 淺野 研 眞

刊行者 酒井 淳 三

刊行者 大 雄 閣

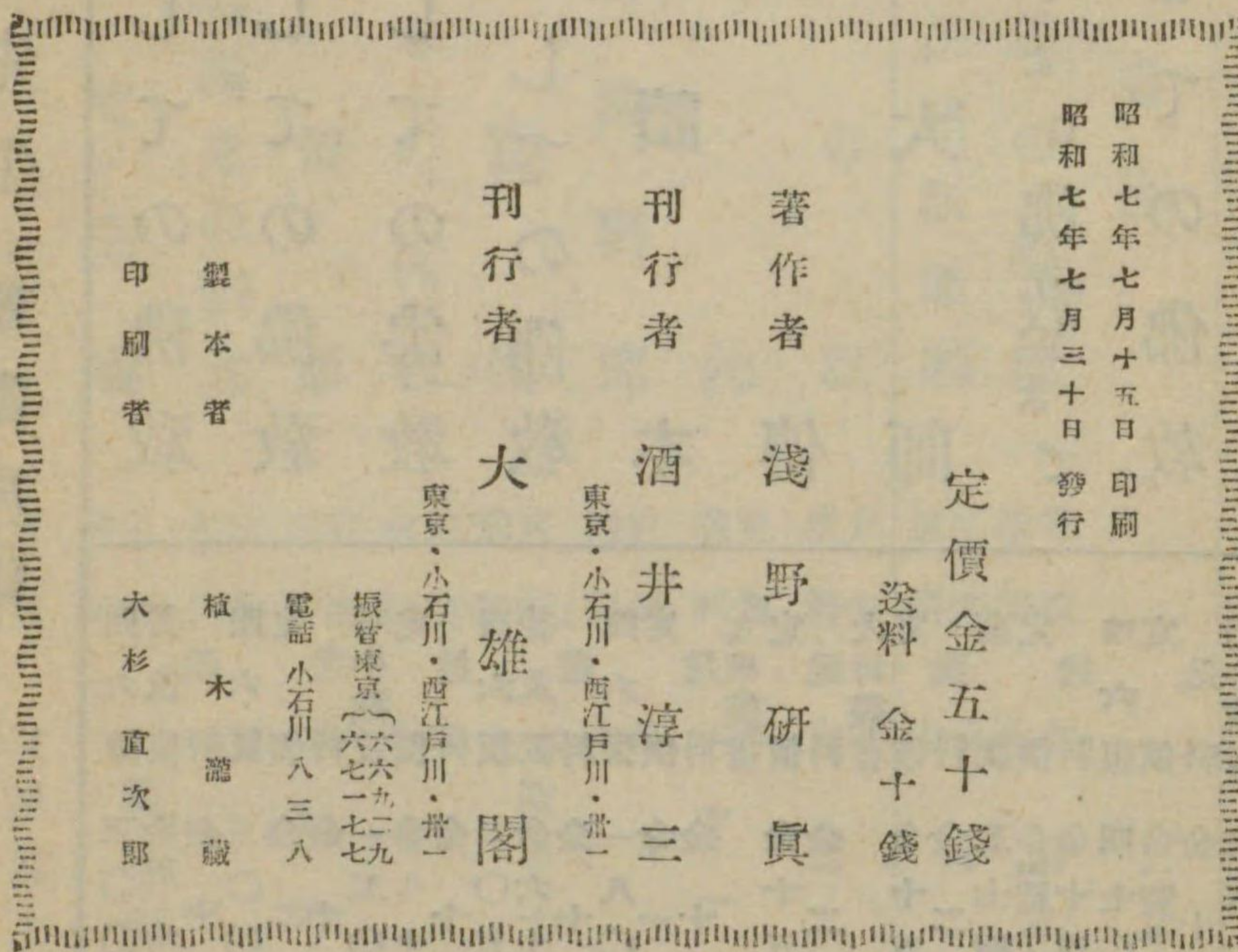
東京・小石川・西江戸川・番一

振替東京(六六九二九
六七一七七)

電話 小石川 八三八

製本者 植木 謙 藏

印刷者 大杉 直次 郎



文學博士 高楠順次郎先生 著書目録

第三十版	生の實現としての佛教	四六送及六	三〇五
第十五版	宇宙の聲としての佛教	四六送及六	三〇五
第十二版	理智の泉としての佛教	四六送及六	三〇五
第十版	人文の基調としての佛教	四六送及六	三〇五
第三十五版	佛 教 讀 本	四六送及六	一〇五
第十六版	佛 師 傳	四六送及六	一〇五
第四版	見 眞 大 師	四六送及六	一〇五
第四版	ウパニシャツトよりの佛教まで	四六送及六	一〇五
第五版	人間學としての佛教	四六送及六	一〇五
第四版	中等教科書 佛教辭典	四六送及六	一〇五

大雄閣刊行書目録

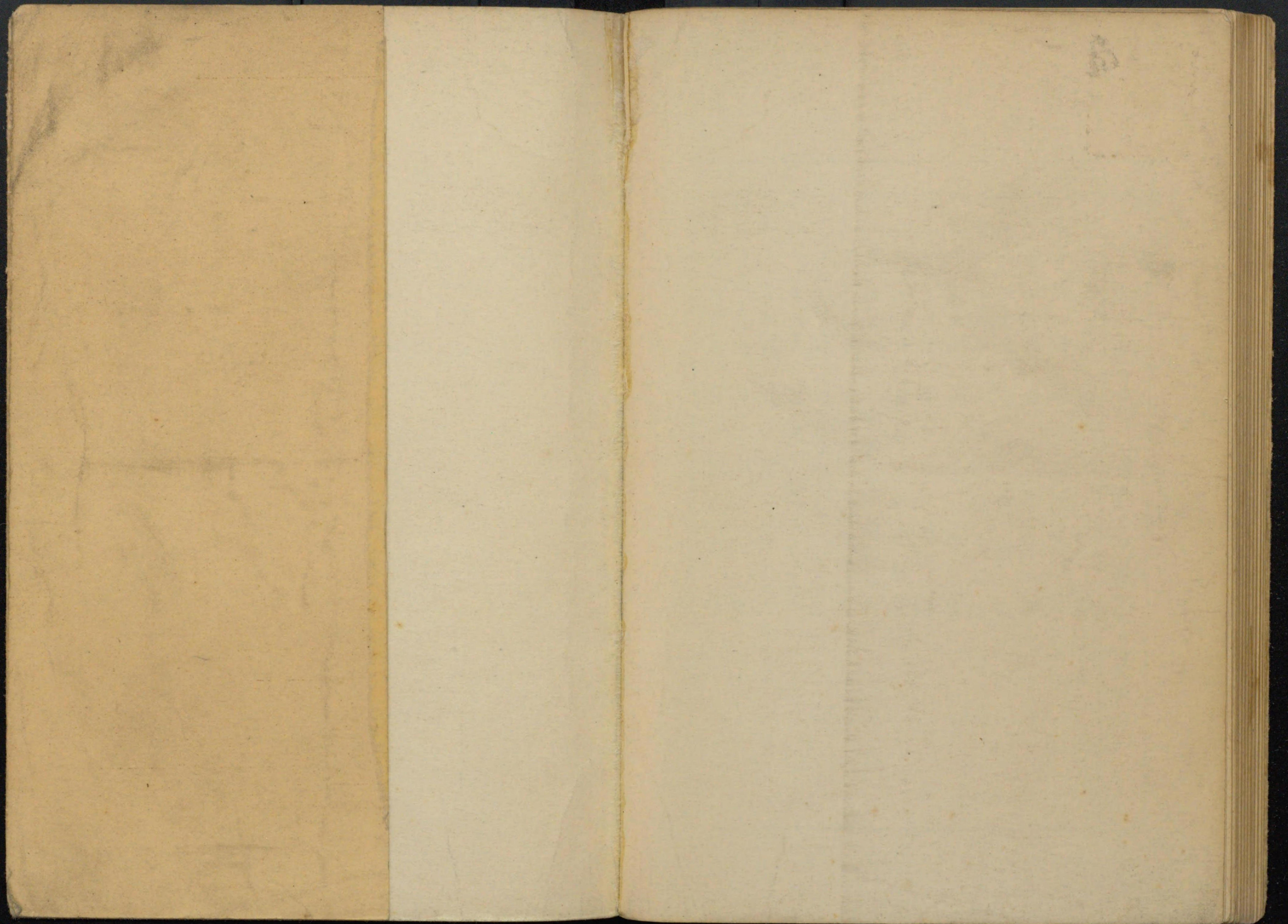
最新刊書

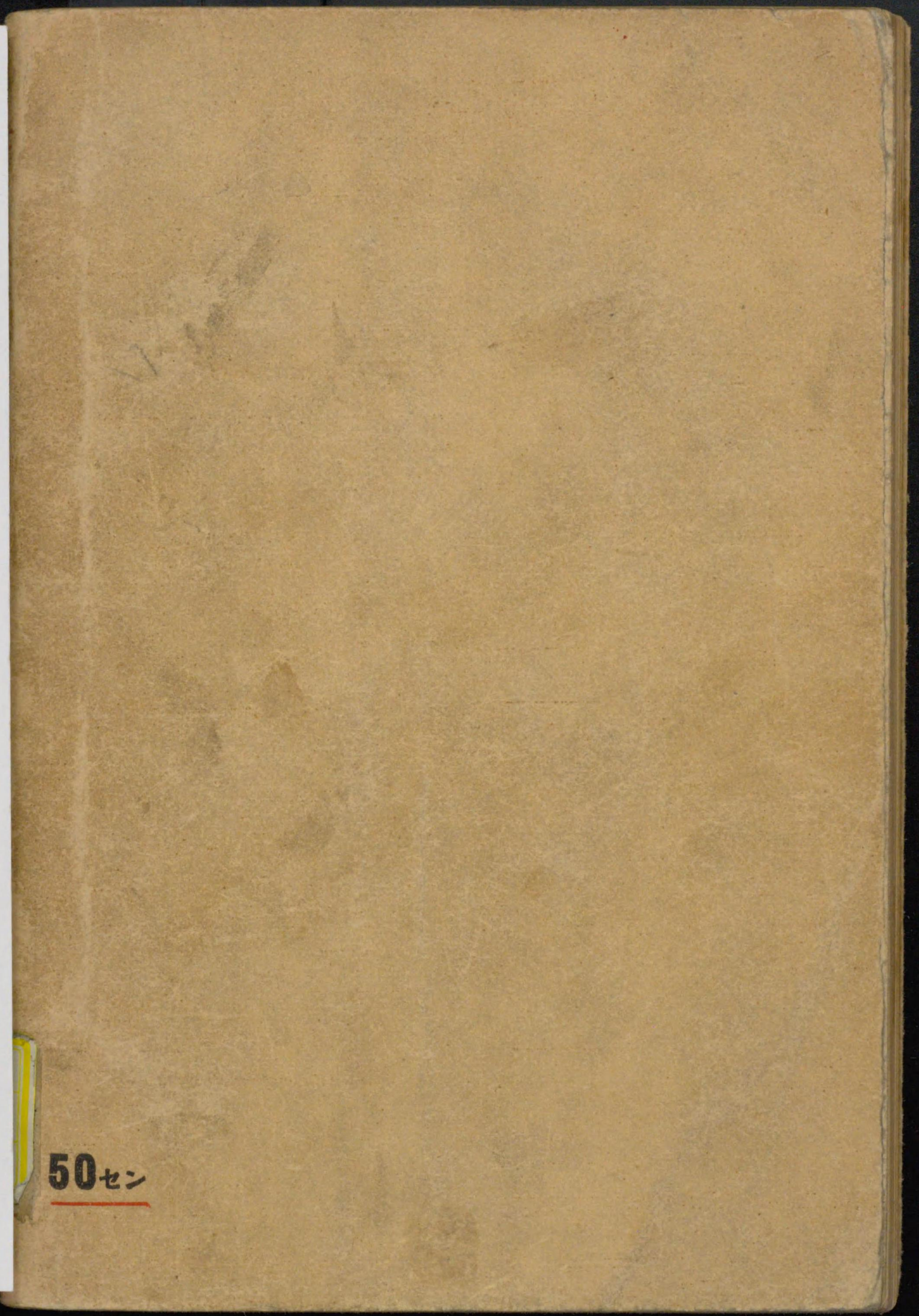
小林一郎著	佛 陀 の 教	送定	十三	二	錢圓
オランダ原著 木村泰賢、景山哲雄共譯	佛 陀 美 術 研 究	送定	二五	一	錢圓
アルフレッドフシエ著	佛 教 美 術 研 究	送定	十三	二	錢圓
白井成允著	善 の 實 現	送定	十一	十	錢圓
白井成允著	信 仰 と そ の 反 省	送定	十二	十	錢圓
高楠順次郎編	法 寶 留 影	送定	二十	一	錢圓
小野玄妙著	大 乘 佛 教 藝 術 史 の 研 究	送定	二五	一	錢圓
シルバン・レヴィ著 山田龍城譯	佛 教 人 文 主 義	送定	十一	十	錢圓
鈴木大拙著	隨 筆 禪	送定	十二	十	錢圓
松永材著	日 本 主 義 の 論 理	送定	十七	十	錢圓
淺野眞著	無 神 論 と 反 宗 教 運 動	送定	十五	十	錢圓

大雄叢書

各冊定價二十錢・送料二錢

一	高楠	順次郎著	佛	傳	〔本 價 十五錢〕
二	宇井	伯壽著	根	本	
三	木村	泰賢著	道	徳の意	
四	長井	眞琴著	佛	教の戒律	
五	赤沼	智善著	大乘	運動の意	
六	南條	文雄著	信	の意	
七	小野	玄妙著	佛	像の概	
八	羽溪	了諦著	佛	教の中心	
九	土屋	詮教著	宗教	教育問題の歸結	
十	小野	清一郎著	社會	理想としての淨土	
十一	ベツツ	オールド著	現代	世界觀としての天台佛教	
十二	村上	專精著	思	ひ出のまにまに	
十三	長井	眞琴著	親	鸞聖人	〔本 價 十五錢〕
十四	高楠	順次郎著	見	眞大	〔本 價 十五錢〕
十五	深	安文著	思	想大	〔本 價 十五錢〕





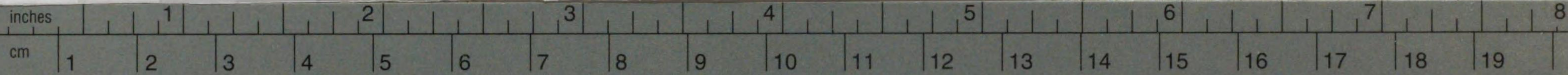
50セン

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

